特集：世界遺産を学ぶ・知る

比較文明の旅へ

吉　村　作　治
サイバー大学学長・サイバー大学世界遺産学部学部長・教授

文明の必要条件と十分条件

文明は孤立したものではなく，地域や時代，そしてその内容についても相互が関連している。古代エジプト文明を考えてみても，エジプトの文明要素はその環境やそこに住んでいた人間の感性から出た独自の文明ではあるが，そもそもナイル川周辺に住んでいた人たちの思想に，異国の人々の考え方が影響を与えたことで華が咲いたものである。今一言で環境という言葉を使ったが，その環境ですら文明に大きな影響を与えたことはギリシアの歴史家ヘロドトスの「エジプトはナイルの賜物である」という言葉に示されている。もちろんこの言葉に対して，「ナイル川という川がなければ古代エジプト文明ができない」とするならば，ナイル川以外にもそれに匹敵する，コンゴ川，アマゾン川，ライン川などには同時期にエジプト文明のような偉大な文明ができなかったのかという反論がでる。それは文明の必要条件と十分条件の話である。

すなわちナイル川は文明成立における必要条件なのだ。ということは他の大河もみな同じ必要条件ということになる。古代の四大文明全てにこれがあてはまる。しかし大河があるだけでは文明ができないことは歴史的事実が証明している。そこに優れた人間がいることが十分条件となる。この２つの要素が重なり合って文明ができるわけだ。

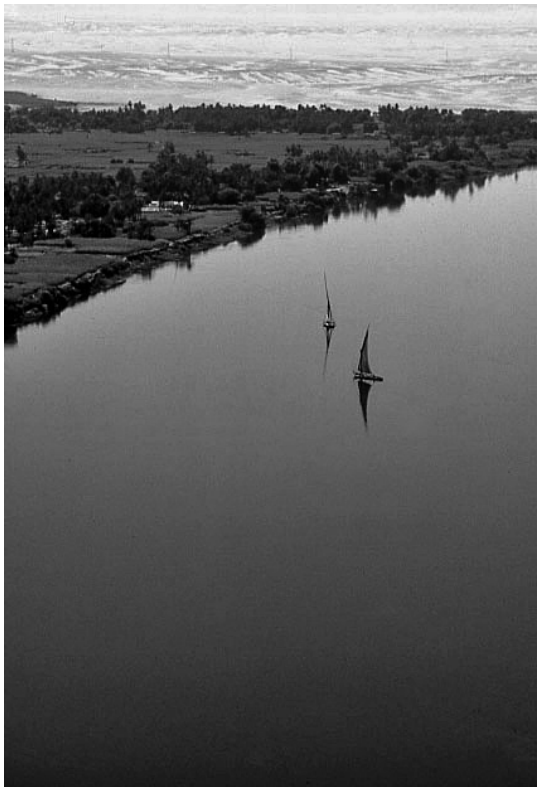


写真１　エジプトを悠然と流れるナイル川

なぜ人間は文明を作ったか

文明というのは人間が作ったもので，言うまでもなく他の動物や植物といった生命体が

写真 2　ベトナム・メコン川の流域の住居

写真 3　メコン川くだりに出かける筆者

作った例はない。時には，サルが鍵を開けたとか犬が計算をしたというニュースがでるが全ての動物にあてはまらない，又，人間がそれをやってもニュースにならないように当然のことで，誰でもができることだからである。しかもそれらのサルや犬は自発的にやるのではなく調教師など人間によって訓練されてやっとできるのだから，これも間接的に人間の力と言えるのだ。こうした人間の所産である文明はどうして興きたのであろう。一言で言うと文明の興りは人間の切羽詰った必要性から出たのである。

自然から人間を守るための「家」

例えば家。家は人間にとって生きていく上で絶対に必要な要素だ。しかし人類 500 万年の歴史で家をもったのはせいぜい 6000 年くらい前，すなわち人類史の 90%近い時間，家をもっていなかったのである。では家をもたない長い間，人間はどうしていたのかと言うと，はじめは野にすごし，寒冷・乾燥化した時代には山の中腹の洞窟生活をし食糧を捜し求めていた。古代エジプトの象形文字（ヒエログリフ）で家を表す文字は畑の近くに建てた小屋の形をしていて，その意味は守るというものだ。家とは原義的には自然から人間を守る，風や雨などから人間を守護することから始まっているわけだ。アルファベットという言葉あるが，これは正確にはアルファ，ベイトというものでＡとＢを表す。意味は，牛と家を表わす語だ。オリエント世界では人間より家畜である牛の方が大切なので，家畜を守るために家があったことを意味している。

こうしてみると，今私たち人間が必要以上に大きな家に住んだり，内装に金をかけて家自慢をしているのは神に対する冒とくであることがわかる。もともと文明が発達するという言葉の裏には，自然を破壊しているという意味があることを私たちは忘れてはいけないと思う。あのどう猛なライオンだって空腹でない限り例えまるまると太ったカゼルが自分の目の前を通ったとしても，飛びかかって殺したりしない。ライオンがガゼルを殺す理由はただ一点，自分の生命を守る ── 空腹を満たす ── ことだけなのだ。人間はグルメとか言って食べもしない動物を殺し，料理くらべをしてキャーキャー言って騒いでいる。自然に対する冒とくである。

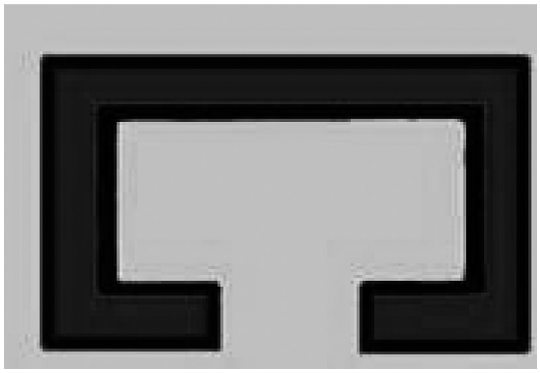


写真 4　古代エジプトの象形文字（ヒエログリフ）

写真 5　中国文明　河南・大河村遺跡（新石器時代）
の約 5000 年前の住居跡

写真 6　メソポタミア文明　マリ遺跡の住居跡

写真 7　アフリカ，アルジェリアの世界遺産
タッシリナジェール　動物を描いた岩絵

地球環境の保全の意識

こうして考えていくと文明の未来は暗いものになってしまうが，私が言っているのは自然と良き折り合いをつけながら暮らしていこうというものなのだ。地球のために地球環境を保全するだけでなく，人類が末永く生き延びていけるために地球環境を保全しようという当事者意識の再確認なのである。

なぜ文明を比較するのか

文明のとらえ方は人によってまちまちであるし，又それでいいと思うのだが，いろいろな地球の文明を勉強したり ── 地理学，地誌学 ──，同じ地域の歴史を学んだり ── 歴史学，考古学 ──，同じテーマの真理を求めたり ── 文化人類学，民俗学 ── などいろいろなアプローチができる。どれでもいいから一つずつ手をつけていくのが早道だ。まず地球の現状を，現代文明の現況を調べ，知ることから始めよう。そしてその歴史や材料の本質に手をつけ，比較し，分析することで論を立てよう。そうすると己ずと未来が見えてくる，というか導きだされる。私の学生への教えのひとつに，「未来はあるものでなく，作るものだ。過去は作るものではなく ── ねつ造してはならないというイミ ── 知ることである。そして過去を分析，解析することで明るい未来が作られる」というのがある。これらの作業行程をスムーズに遂行するために文明の比較がある。よって比較文明学は総合科学なのである。

世界遺産学のすすめ

古　田　陽　久
サイバー大学世界遺産学部・教授

世界遺産は時空を超えた地球と人類の至宝

世界遺産は，46 億年の地球史，500 万年の人類史のなかで培われてきた。2008 年 7 月 2 日から 10 日まで，カナダのケベック・シティで，第 32 回世界遺産委員会（世界遺産条約締約国の 185 か国から選ばれた 21 か国で構成）（写真 1）が開催され，モーリシャスの「ル・モーンの文化的景観」，サウジアラビアの「アル・ヒジュルの考古学遺跡」，カンボジアの「プレア・ヴィヒア寺院」，中国の「福建土楼」と「三清山国立公園」，パプアニューギニアの「ククの初期農業遺跡」，スイスとイタリアの 2 か国にまたがる「レーティシェ鉄道の景観」（写真 2），ドイツの「ベルリンの集合住宅」，メキシコの「オオカバマダラ蝶の生物圏保護区」など多様な 27 物件が，新たに「世界遺産リスト」に加わり，ユネスコの世界遺産の数は，世界の 145 か国に分布する 878 物件になった。分類別では，自然遺産が 174 物件，文化遺産が 679 物件，複合遺産が 25 物件である（図表 1）。

わが国の「平泉－浄土思想を基調とする文化的景観」については，世界遺産にふさわしい「顕著な普遍的価値」の証明が不十分とされ，残念ながら「世界遺産リスト」への登録は見送られた。日本の世界遺産の数は，14（自然遺産 3，文化遺産 11）のままである。

ユネスコの「世界遺産リスト」には，毎年，各分野を代表する世界的に「顕著な普遍的価値」を有する多様な世界遺産が登録されている。自然景観，地形・地質，生態系，生物多様性，考古学遺跡，歴史都市，文化的景観，産業遺産，20 世紀の建築など，時空を超

写真 1　第 32 回世界遺産委員会
ケベック・シティ会議

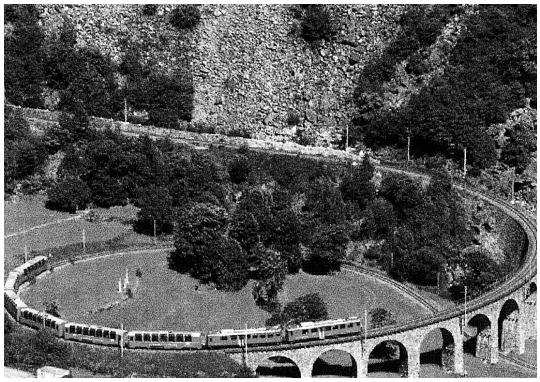
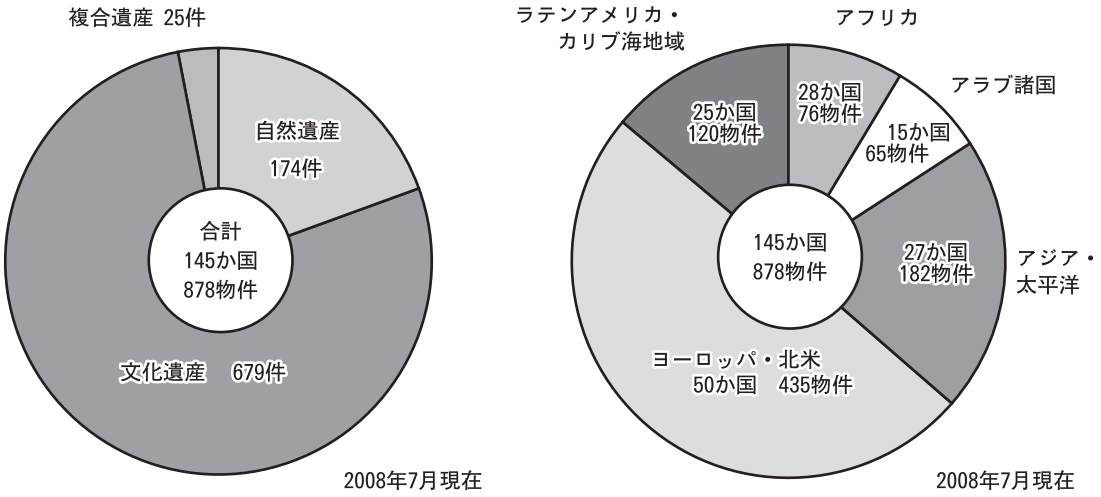


写真 2　スイスの「レーティシェ鉄道」
写真提供 SFOC



図表 1　世界遺産の数〈遺産種別〉〈地域別〉

えた，地球や生物の活動の営為，それに，人類である人間が創り出した，かけがえのない財産，それが「世界遺産」といえる。

世界遺産学のすすめ

私たちが世界遺産のことを知ろうとする時，まずどんなことを学ぼうとするだろうか。世界遺産のある国や物件の位置，自然環境や生態系，気候，風土，歴史的背景，世界遺産と人間との関わり，世界遺産を保護管理など，実に，多角的に多くのことを学ぶことができる。「世界遺産学」は，総合的，学際的，そして，国際的な学問であり，サイエンスなのである。

「世界遺産学」は，自然学，地理学，地形学，地質学，生物学，生態学，人類学，考古学，歴史学，民族学，民俗学，宗教学，言語学，都市学，建築学，芸術学，国際学，法律学，環境経済学，行政学，観光学など，地球と人類の進化の過程と未来を学ぶ総合学問であり，いわば，「世界遺産と総合学習の杜」である。

世界遺産を有する世界の国と地域は，気候，地勢，言語，民族，宗教，歴史，風土などが異なり，また，素晴らしい芸術，音楽，文学，舞踊，美術，工芸，祭礼，儀式など独自の伝統文化も根づいている。

世界遺産そのものの内容を学ぶ時，個々の物件の背景にある様々な分野の学問から得られる知識や情報を総合すれば，関連性や類似性，或は，独自性を発見したりすることが出来る。世界観，国家観，民族観，宗教観，平和観も新たなパラダイムへの転換が必要で，その視座の一つが，地球市民としての「世界遺産学」なのである。

この様な視点で物事をとらえた場合，現代社会，そして，政治，経済，社会のシステムも時代のニーズに適った変革が求められている。教育分野についても，学校教育の教科，生涯学習や地域学習などの社会教育のテーマに，「世界遺産学」や「世界遺産」が導入さ

写真 3　第 30 回世界遺産委員会で北京大学の呉先生，欧州共同体大学院のブログ先生と

写真 4　第 31 回世界遺産委員会でチリ国家記念物審議会のアクーナさん，WMF のブランンフェルドさんと

写真 5　サイバー大学福岡キャンパスで

れつつあり，また，インターネットなどボーダレスな情報技術の進展によって，何時でも何処でも教育と学習ができる環境と社会基盤が整備されつつある。

「学ぶ」ということは，「理解」し「行動」することにつながる。世界遺産を通じて，様々な分野の学問にアプローチすることで，真の国際理解や，かけがえのない地球環境や平和の大切さの理解も深まり，国際交流や国際協力の輪も広がる（写真 3）。

「世界遺産学」をおすすめしたいと思う。トンネルのような閉塞状況の中から，一筋の光明を見い出せるかも知れない。

百学連環の世界遺産学

世界遺産の多様性，多様な世界の国と地域の民族，歴史，地理，生活，産業を学び，それぞれの世界遺産地が抱えている問題点や課題を認識し，その解決策を世界遺産地の人々と共に考えていく事も大切で，この様な努力があってこそ，世界遺産の保護や保存を通じての真の国際協力が達成されるのだと思う。世界の平和を保っていくためには，文化の多様性を認識し，異文化の理解に努める必要がある（写真 4）。

世界遺産は，世界遺産登録をゴールとするのではなく，関係行政機関や地元住民などが一体となって，世界遺産登録後も，中長期的な保存管理や監視活動の為に協働していくことがきわめて重要である。世界遺産を取巻く環境が，脅威，危険にさらされ深刻化すると，

大変不名誉なことになる。エクアドルの「ガラパゴス諸島」の様に「危機にさらされている世界遺産リスト」に登録されたり，終末的には，オマーンの「アラビアン・オリックス保護区」の様に「世界遺産リスト」から抹消されることにもなりかねない。

世界遺産は，保存が基本であるが，教育，観光，地域づくりやまちづくりなどに活用していくことも大切である。しばしば，本末転倒になって，貴重な自然遺産や文化遺産が損なわれる場合があるが，そうならない様な危機管理も大切である。

私たち人類は，地球上のかけがえのない世界遺産をいかに守り未来に継承していくべきなのか，百学連環の世界遺産学をおすすめする（図表 2，写真 5)。

図表 2　世界遺産学のツリー

世界遺産を映像で語ろう

朝　田　健　治
サイバー大学世界遺産学部・教授

映像制作のすすめ

最近，世界遺産に対する人々の関心が高まり，ビデオカメラで遺跡などを撮影する人が増加している。このことは，映像に携わってきた私にとって喜ばしいことであるが，ほとんどの人が撮影するだけに終わっていることが残念なことだと思っている。映像は，見る人に自分の思想や考えを伝える手段である。撮影した素材を編集し音付け（ナレーションと音楽録音）することで，はじめて映像がメッセージを伝える道具になるのだ。その意味でも，出来るだけ多くの人に，文化財などの記録を〈私の見た文化財〉，あるいは〈文化財をこう考える〉と言ったテーマを持った映像として残していただきたいと考えている。

パソコンでできるポストプロダクション

撮影後の編集，音付け作業をポストプロダクションと云う。ポストプロダクションは，映像に制作者の意図を織り込んでいく作業である。構成，編集によって伝えたい事柄，主張したい意見が明確になっていく。音楽によって，制作者の意図に沿った感情が映像に付け加えられる。同じ映像でも音楽次第でコミカルにもシリアスにもなる。ポストプロダクションで，映像に命が吹き込まれる。

かつて，ポストプロダクションは高価な機材を揃えた専門のスタジオでなければできない，いわばプロの職域であった。ところが，最近は，パソコンの「ノンリニア編集ソフト」を使って簡単にポストプロダクションができるようになった。「ノンリニア編集ソフト」とは映像をパソコンに読み込み，それを編集し，音楽やナレーションの録音ができるアプーションであるが，Windows には「Windows ムービーメーカー」が，Macintoch には「iMovie」といった「ノンリニア編集ソフト」が無料でバンドルさ

写真１　中国青海省・鳥島での撮影風景

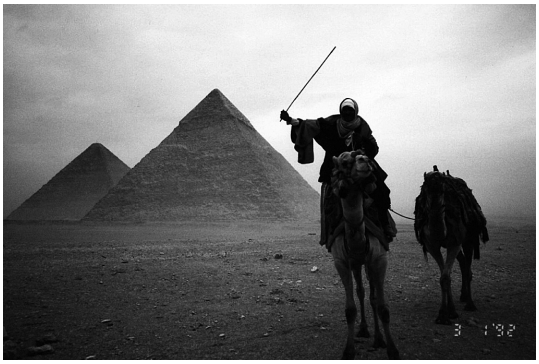


写真 2　早朝、朝靄に煙るギザのピラミッド

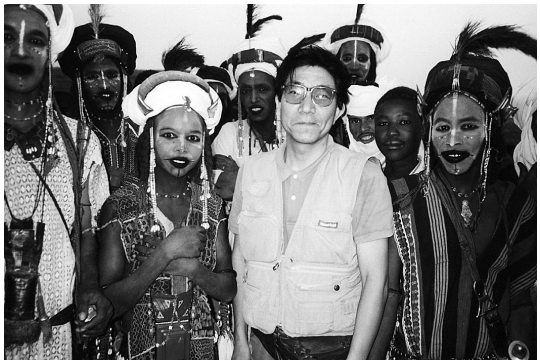


写真 3　ニジェールにて、ポロロ族の男たちとの記念撮影

れている。つまり，カメラとパソコンがあれば映像制作ができるのである。

映像制作を通して世界遺産を学ぶ

長年，サイバー大学の吉村学長が率いる古代エジプト調査隊に映像記録班として参加し，映像制作という立場から世界遺産を見てきたが，映像制作に携わっていると，いつの間にかその世界遺産に関する知識が身についてくる。その訳はナレーション台本にある。ナレーション台本は，基本的に書籍から引用するが，書籍の表現をそのまま使うわけにはいかない。また，視聴者が耳で聞いて分かるように，平明な文章，話し言葉に言い換えなければならない。この時，言い換えが妥当かどうかを確認するために複数の書籍にあたり，事実を調べる。特に，うろ覚えの固有名詞，地名，年代などの確認は必須である。こうした作業を続けているうちに，いつの間にか「門前の小僧」になっていると感じる。

同様の効用が映像の編集作業にもある。編集は，長時間の素材映像を決められた長さまで短縮する作業だが，同じ映像を何度も繰り返して見るうちに遺跡のディテールが記憶に刻まれる。例えば，私は，カフラー王のピラミッド内部に入ったのは，25 年ほど前に 1 度，そして，数年前に 1 度の計 2 回である。しかし，カフラー王の内部の様子はかなり鮮明に思い浮かべることができる。これは，編集中に何度も映像で見ているからだと思っている。また，繰り返し見ることで，撮影現場では見落としたことを編集中に映像で発見するといったこともしばしばある。こうした経験から，私は，映像を編集することで，何度もそこを訪れるのと同様の効果があるのではないだろうか。

知識と情報をもって撮影に臨む

撮影対象に関する知識や情報は，撮影時でも重要である。古代遺跡を前にして，どの部分にカメラを向け，どのようなカメラワークで撮影するのかという判断は，その遺跡に関する知識がなければできない。知識が何もなければ，遺跡は瓦礫にしか見えないのだ。撮影は，建物の形状や装飾などの外観を撮れば済むのではない。その色や形の持つ意味を理

写真４　中国最大の湖・青海湖にて撮影

写真５　コンゴ共和国にて、野生ゴリラの撮影

解して撮らなければよい撮影はできないのだ。

撮影の基本は安定したカメラワーク

よく，ビデオの撮影は難しいといわれる。写真はきれいに撮れるがムービーは下手だという人の撮ったビデオを拝見するとほとんどが頻繁にパン（撮影しながら左右にカメラを動かす）をする，映像が揺れて不安定，というふたつに集約される。この二つを改善するとビデオ撮影は格段に上達する。以下は，その改善法である。

⑴　撮影の基本はフィックスである。フィックスは撮影中にカメラを動かさないので，写真を撮るのと同じ要領である。カメラを被写体に向け，少なくともゆっくり 10 を数える間はカメラを動かさないで撮影する。そして，映像のサイズは，ロング，ミドル，アップの 3 種類のサイズを使い分ける。ロングは，文字通り「遠景」で，例えば，遺跡ならば遺跡全体，あるいはもっと広域を撮したサイズである。ミドルは，発掘作業でいえば，土砂を運んでいる，トレンチを切っているなどの作業内容が分かるサイズである。作業の状況や内容を伝える映像として，もっとも多用されるサイズがこのミドル・サイズである。そして，刷毛の先に現れた出土物の一部とか，遺物に刻まれた文字など，その詳細を見たいところにカメラが寄って撮るアップ・サイズである。3 つのサイズとフィックス。これを肝に銘じておけば，ほぼ合格点の撮影ができる。

⑵　カメラを安定させること。不安定に揺れる映像は見ていて疲れる。そこで，プロは三脚を使って映像を安定させる。ところが，世界遺産などでは三脚の使用が禁止されていたり，高額の撮影料を要求される。そこで，手持ちでカメラを安定させる方法が役に立つ。基本は，カメラを両手で支えて脇を締めることだ。近くに木や壁などがあればそこにもたれかけて体を安定させる。もし，カメラに手ぶれ補正機能があればそれを利用する。

かつて，報道カメラマンが実践してきたカメラを安定させる方法がある。タコ糸程度の細い紐をカメラの底の三脚ネジに，ネジを使って取り付け，紐の反対側を輪にしてその輪に足を通して踏みつけ，カメラを上に押し上げるようにして持つという方法だ。長くカメラを持ってくると手が震えてくるが，カメラを押し上げるように力を入れると手の震えを

抑えることができる。

故郷の伝統を記録しよう

私は，20 年ほど前，テレビ番組のためにアジア，アフリカ，中南米などいわゆる第 3 世界の民族の風俗・風習を撮影してきた。今ではこれらの地域の暮らしも大きく様変わりし，風化したり消滅してしまった伝統行事も少なくない。そうした状況のなか，記録映像に関わってきたひとりとして強く感じるのは，映像アーカイブの重要性である。

映像は，〈その時・その場所〉に居る人だけが記録できるメディアであり，貴重な歴史資料である。

我々の周辺でも，慣習，伝統行事，伝統工芸が年々失われつつあるのではないだろうか。一旦失われた伝統がよみがえることはまずないであろう。消滅する前にそれらを記録し，映像アーカイブとして保存することが急務ではないだろうか。

日本の古代文化を学ぶ

高　橋　信　雄
サイバー大学世界遺産学部・教授

緊急発掘調査から国指定史跡へ

日本の歴史を知るうえで重要な役割を果たす遺跡は，必ず残されるわけではなく，開発のために，調査後その大半の遺跡は失われてしまう。しかしながら，その文化的価値が認められて残され，当時の様子を今日に伝えてくれるものもある。ここでは産業開発のため，一時は消滅の危機にさらされながらも，やがて国の史跡になった岩手県一戸町の御所野遺跡の保存に至る経緯や概略を通して，遺跡の重要性について見ていくこととする。

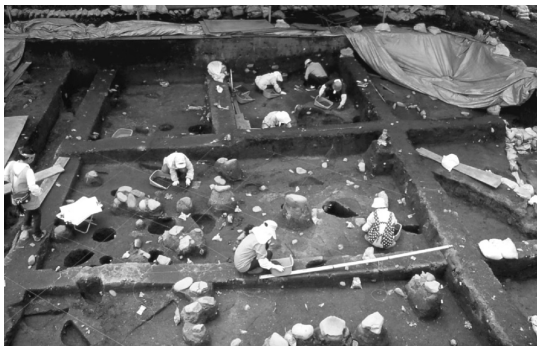
私は，御所野遺跡の発掘調査段階から，史跡整備にまで関った一人である。現在，御所野遺跡は，青森県の三内丸山（さんないまるやま）遺跡や秋田県の大湯環状列石（おおゆかんじょうれっせき）などとともに，縄文時代の遺跡として世界遺産登録を目指している。

御所野遺跡は，1989 年に農工団地造成のために緊急調査が開始され，まもなく，縄文時代中期の大集落であることが確認される。

ちょうど同じころ，岩手県の文化財保護行政を担当していた私は，平泉町の柳之御所（やなぎのごしょ）遺跡の緊急調査に対する遺跡保存運動でも，堤防・バイパスの建設と文化財保護との間で，対処に苦慮していた。

柳之御所遺跡は，その後，奥州藤原氏の政治の中心であった「平泉館（ひらいずみのたち）」として保存されることになり，現在も『平泉 ── 浄土思想を基調とする文化的景観』として世界遺産登録を目指している平泉遺跡群の中心的な遺跡でもある。

御所野遺跡の調査担当者から相談を受けたとき，柳之御所遺跡への対応を教訓に，「できるだけ早く遺跡の重要性をアピールするとともに，開発側の理解を得る行動と，市民の審判を仰ぐための情報公開が必要だ」と助言した。



（一戸町教育委員会提供）
中央の配石遺構の検出中。
写真 1　御所野遺跡の緊急発掘調査時の調査風景

それまでの調査成果が大きく報道されたこともあって，現地説明会には 600 人が詰めか

けた。結果，市民の後押しと町の英断で保存が決まり，その後，遺跡の重要性は高く評価され，国の史跡に指定された。

ストーンサークルをもつ縄文時代の大集落

御所野遺跡は，東西 500 m，南北 120 m の細長い台地に立地し，「中央のムラ」，「東のムラ」，「西のムラ」と呼ばれる 3 ヵ所に集中して 600 棟を超えると推定される住居が確認されている。

台地の中央部にはストーンサークルとも言われる配石遺構がみられる。東西 80 m，南北 150 m の範囲を土木工事によって平らにし，配石は花びら状に石を配し，そのひとつが立石となる 2 m ほどのグループをいくつも環状に並べたものである。

さらにこの周囲には，掘立柱建物がめぐっているのが確認されている。その隣には使われなくなった道具や食べものなどをカミに送るモノ送りの祭祀が行われたと考えられる盛土遺構などがある。

この大遺跡の重要性は，多くの遺構が発見されたことだけではない。周辺を見渡しても，近代の建物などの人工物は見られず，秋になれば遺跡内に群生する栗の木はたくさんの実をつけ，まわりのすべてが紅葉に染まる。つまり，縄文時代のムラの雰囲気がそのまま残されている遺跡なのである。

土屋根の住居

この遺跡ならではの新事実の発見もある。それまで縄文時代の竪穴（たてあな）住居の屋根は，すべて茅葺（かやぶき）と思われてきたが，御所野遺跡の調査ではじめて，土が載せられていることが確認されている。

保存状態の良い住居の壁際には割り材が立ち並び，柱材はすべて残り，焼けた土で覆われていた。その後，復元住居を作っての実証，さらにはその土屋根竪穴住居の焼失実験ま

（一戸町教育委員会提供）

楕円形の組み石で一つが立石となっている。

写真 2　中央のムラから発見された配石遺構のひとつ

（一戸町教育委員会提供）

写真 3　中央のムラの配石と掘立柱建物の復元状況

で行われている。

祭祀とモノ送りと祭壇

御所野遺跡のムラは，墓城を中心に営まれ，様々な祭祀が行われたと考えられる。その核となるのが前述のストーンサークルである。ストーンサークルを取り囲むように掘立柱建物がいくつも建てられ，その隣では，モノ送りの儀式が行われたらしき盛土遺構が広範囲にみられる。

この御所野のムラでは，竪穴住居の中でも祭祀が行われていたようである。西のムラの中心的な建物では，奥のほうに「石棒」という縄文時代の祭祀の道具が立てられ，その周辺からトックリ形土器や彩色土器，あるいはミニチュア土器など，実用的ではない土器が8点，完全な形でまとまって出土した。

つまり，奥の間が祭壇となっており，近くに石棒が祀られ，小型の土器類が捧げされた可能性が極めて高い。入り口中央にあった炉も，神聖な場所であったと考えられる。カミを祀った奥の場所と結ぶ線の右と左が，男の間・女の間に分けられていた可能性もある。

（一戸町教育委員会提供）
竪穴の住居の縁には割り材が周囲全体に立てられて検出されている。
写真4　焼けた住居の炭化材と石棒

（一戸町教育委員会提供）
このような土器が8個完全な形で出土している。
写真5　トックリ形土器の出土状況

遺跡の保存から史跡整備へ

発掘調査の成果を市民に還元するため，町は国や県の支援を受けて史跡の整備を行っている。中央のムラの配石遺構や東西のムラそれぞれに，土屋根の竪穴住居跡や樹皮葺きの竪穴住居，掘立柱建物などを復元し，「御所野縄文公園」として公開している。

また，遺跡の紹介や出土品を公開をする「御所野縄文博物館」を建設し，竪穴住居を模した体験施設も設けた。現在も多くのボランティアに支えられて，史跡の解説や体験学習など様々な催しが行われている。ムラの中には，栗林もウルシの木の林もあり，四季折々の景色はまさに縄文ワールドである。

遺跡には，多くの情報が含まれている。発掘調査とは，その中からいかに多くの情報を

引き出すかということであり，調査者にはあらゆる視点からの検討が求められる。そして，その成果を一般市民に理解してもらう必要もある。

縄文時代の遺跡の世界遺産登録には，縄文時代に一体化した風土を形成していた地域の連携が最も重要になるのではないかと思う。

（一戸町教育委員会提供）
落葉広葉樹におおわれ，紅葉の美しいムラが出現する。
写真 6　秋の御所野縄文公園西のムラ

中国考古学最前線

小　柳　美　樹
サイパー大学世界遺産学部・准教授

経済発展下の中国考古学研究

経済発展は考古学研究にも大きな影響を与えることは言うまでもない。現在の中国でも都市部の再開発，高速道路建設，圃場整備などに伴う緊急発掘調査が各地で絶え間なく行われている。大発見のきっかけが高級別荘地の開発によるものだと耳にすることも多く，現代中国の世相を反映している。

新発見の情報に接して嬉しい反面，盗掘のニュースが日常茶飯事となってしまったことは残念である。盗掘者たちは組織的なプロ集団になって，綿密な計画と万全の装備により古墓や窯跡などを荒らしまわっている。時には調査の休止期間を狙って発掘現場や倉庫に忍び込み，時には調査員を恐喝して文物を強盗するという事件も起きていることを聞き及んでいる。強奪された文物が特殊なルートで海外へと流出してしまい，逮捕された盗掘者たちは厳罰に処されていることが報じられているが，犯罪行為はいまだに後を絶たない状況にある。

「一切の文物は国家に属する」── 白いペンキで遺跡周辺の民家の煉瓦壁に大きく書かれたスローガンは中国が抱えている文化財保護の問題を強く叫んでいる。

書き改められる中国三代王朝史

中国考古学の概説書が新情報や新見解を盛り込んで出版されても，数年足らずで書き改めを迫られるような勢いで研究が進展している。新しい遺跡や文物が陸続と発見され，その解釈は「新しい古代中国像」を創出し続けている。最新の発掘出土情報を貪欲に収集し，研究の動向をいち早く掴み，互いに議論を交わしていかなければ，即座に研究の最先端から脱落していってしまうという焦燥感を抱きながら研究を進めているのは，わたしだけではないだろう。また，中国考古学の王道が夏・商（殷）・周と称される三代王朝研究であることをも改めて思う次第である。中国最初の王朝である「夏」王朝の時期が考古学文化では「二里頭（にりとう）文化」期に相当すると考えられてきているが，まだその決定的な証拠を考古学研究から導きだすには至っていない。研究者の誰もがその「決め手」を探すのに躍起になっている。王朝の存在が明確なのは商代であり，その評価として，代表となる遺跡 ──

河南省安陽殷墟が2006年に世界遺産に認定されたことは記憶に新しいことである。「夏」王朝相当の遺跡を飛び越して，殷墟が世界遺産に認定されたということは中国王朝史研究のひとつの到達点としても大きな意義があるだろう。

将来，三代王朝に関係する他の遺跡が世界遺産となり得るのか，また50万年に遡る北京原人周口店遺跡から殷墟までの間で世界遺産に選ばれる遺跡があるのか興味が尽きないところである。

陝西省周公廟遺跡の陵墓群は未発見だった代々の周王の墓と思われ，注目が集まっている。望むべきことは未盗掘であることだが，もし盗掘されていても，墓の構造などから，甲骨文や金石文の文字資料や『史記』には語られなかった殷王朝との関係や周王朝の様相が解明されることが期待できる。王権の出現に関する研究では山西省陶寺遺跡や安徽省尉遲寺遺跡，浙江省良渚遺跡群など新石器文化の終わり頃に関心が寄せられている。陶寺遺跡では日の出の観測が可能な祭祀基壇をはじめ，宮殿区や有力者級の墓の発見が相継いでいる。副葬品には土器や玉器，漆器，鰐皮を使用した陶鼓，石磬などがみられ，その後の中国王朝の伝統的な儀礼祭祀となる「礼楽」の祖形をみることができる。今この時にわたしたちは，各地域の高度な文化が融合して「中国世界」「中華世界」が形成されていった状況の目撃者となろうとしているのである。

写真1　中国王朝揺籃の地 ── 陶寺遺跡の風景（山西省）

写真2　陶寺遺跡では土器片や石器が広く散在していた

新しい新石器文化研究への道

現在，わたしが調査に参加させていただいている浙江省田螺山遺跡は，約6500年前頃の河姆渡文化の遺跡である。河姆渡文化は，1970年代に河姆渡遺跡で大量の土器や木器，骨角器，稲米が出土して世界の考古学者たちを震撼させ，黄河文明に匹敵する「長江文明」が提唱されるきっかけとなった文化である。この河姆渡文化を改めて現代考古学の視点で，自然科学の分析・調査方法を駆使して解明していこうと共同研究が組まれている。豊富な地下水に守られた木器や植物遺存体・動物骨や土壌に残る寄生虫・稲米の分析を通して，当時の環境復原，生活領域，生産力などを総合的に検討している。従来，「稲作農耕文化」として注目されていた河姆渡文化が，果たしてわたしたちの分析や視点からは，どのような答えが導きだされるのであろうか。わたしは特に土器や石器などを地道に観察しながら

写真 3　2007 年に開館された「田螺山遺跡現場館」（浙江省）

写真 4　田螺山遺跡では高床式住居，船着場，水田へと向かう丸木橋等が発見された

河姆渡文化と対峙している。環境変化や社会の発展に伴い日常の道具（土器や石器）がどのように変化し，技術革新が起きたのかを検証しようとしているのである。

自分が学生の頃には外国人が中国大陸の遺跡に立つことすら許されない時代であったが，現在ではそれが夢か幻のようである。まさに「現代中国」の恩恵に与っているのであろう。そして，いくつかの不幸な時代を経ても日本と中国の両国間の考古学研究が深い友好関係で結ばれていたからこそ実現していることも忘れてはいけない。それを後輩たちに繋いでいくことも，共同調査を進めているわたしたちの役目だと思っている。

西アジア考古学の挑戦：その歴史と魅力

西　山　伸　一
サイバー大学世界遺産学部・准教授

「西アジア」という地域

西アジアとは，東はアフガニスタンから西はトルコまでの広大な地域を指す。また，西アジアは，ちょうどヨーロッパと，日本を含む東アジアとの中間に位置しており，「中東」または「中近東」とも呼ばれている。日本に住んでいると，この地域からの普段のニュースは，紛争や爆弾テロなどの暗い話題が多い。特に，アフガニスタンとイラクは，現在アメリカ合衆国主導のテロ掃討作戦が実施されているせいもあり，多くの一般の人々は漠然と「あぶない」地域という印象をもっていると思う。

しかし，実際に西アジアを訪れると，紛争やテロなどの暗いイメージとはかけ離れた現地の人々の明るく親切な振る舞いや，ペルセポリス（イラン，写真 1）やハットゥシャ（トルコ，写真 2），パルミラ（シリア，写真 3）などのすばらしい世界遺産に強い感銘を受けることと思う。実は，西アジアこそは，「農耕・牧畜生活の開始」，「都市化社会の誕生」，「世界帝国の登場」など，人類の歴史にとって重要な転機を世界で最初に生み出していった地域なのである。それを私たちに現在

写真 1　イランの世界遺産，ペルセポリスの全景

写真 2　トルコの世界遺産，ハットゥシャの「ライオンの門」

写真 3　シリアの世界遺産，パルミラの列柱道路

に伝えてくれる文化遺産は，今の私たちの生活だけではなく，私たちの未来にとっても重要な示唆を与えてくれるものなのである。「西アジア考古学」というフィールド調査に根ざした学問は，この西アジアの多様ですばらしい文化遺産の成り立ちの過程を探求するために，日々「挑戦」を繰り返しているのである。

西アジア考古学の成り立ち

まず，西アジア考古学の成り立ちについて簡単に説明しておこうと思う。西アジアにおける本格的な考古学遺跡や遺物の探求は，メソポタミア，つまり現在のイラクにおいて19 世紀後半にイギリスとフランスの調査団によって始まった。当時は，『聖書』の記述にある事項を確認して，自国の博物館に「オリエンタル（東洋的）」な遺物をもたらす，というのが大きな目的であった。

しかし，20 世紀に入り，しだいに西アジア考古学は，過去の人間の社会変化や文化の成り立ちの過程を，科学的なフィールド調査を基に研究することへと目的が変化していった。また，ここ 10〜15 年ほどで，発掘された遺跡をいかに「保存修復」するか，という問題が真剣に検討され，さまざまな試みが実践されるようになってきた。つまり，発掘された遺跡は，「考古学者」だけのものではなく，その遺跡がある国のすべての人たちのものであり，ひいては人類全体の文化遺産であるという認識がでてきたのである。

日本の西アジア考古学調査

日本は今から約 50 年前の 1956 年に初めて西アジアにおいて遺跡の発掘調査を開始した。その後，日本からの調査団の数は，徐々に増加し，今では，アフガニスタン，イラン，シリア，トルコ，ヨルダン，イスラエル，サウジアラビア，湾岸諸国などで実に 30 隊以上の日本の調査団がフィールド調査を実施している。

その中でイラクは，かつては日本を含めた多くの考古学調査団が活躍していたが，ここ 20 年ほどは，戦乱と治安悪化によってフィールド調査が中断しているのが残念である。なによりも「平和」あっての考古学調査なのである。

シリアの発掘調査

ここでは，私が関わっているシリアの発掘調査を紹介する。調査は，テル・エル・ケルク遺跡（写真 4）という地中海から 100 キロほど内陸に入ったエル・ルージュ盆地にある遺跡で実施している。この調査は，シリア考古総局と日本の筑波大学の合同調査団により行われている。遺跡の周辺には，古来よりアナトリアとエジプトをつなぐ重要な交通路が通っていた。この調査の目的の 1 つは，今から約 5 千〜3 千年前に栄えた青銅器時代から鉄器時代の文化を明らかにすることである。

写真 4　シリアのエブラ（テル・マルディーフ）遺跡の宮殿跡

写真 5　「丘」のようになっているテル・エル・ケルク遺跡 1 号丘

写真 6　テル・エル・ケルク遺跡 1 号丘の発掘トレンチ

写真 7　テル・エル・ケルク遺跡 1 号丘の発掘風景

この頃，シリアにはすでに大型の都市が出現し，宮殿では楔形（くさびがた）文字による文書が作成されていた（写真 5）。官僚機構や軍隊もあった。この時代の人たちが，なにを考え，どのような生活をしていたのかを知ることは，都市のある生活をしている現代の私たちにもさまざまな示唆を与えてくれる。とはいえ，実際の発掘作業は，地道な作業の繰り返しである。暑い夏に調査を行う場合には，強い日差しをなるべく避けるため朝早くから調査を行い，昼過ぎには発掘を終了する。調査は通常，考古学者と地元で雇った人たちとの共同作業で行われる。発掘は，遺跡に四角形の区画（トレンチ）を設定して，少しずつ慎重に掘り下げていくのである（写真 6）。

トレンチからは，家の部屋，パン焼きかまど，土器，石器をはじめ，さまざまな過去の人間活動の痕跡が現れる（写真 7）。それを毎日少しずつ記録して掘り下げてゆくことで調査は進んでゆく。このような作業の積み重ねで，その遺跡がいつの時代にどのように住まれ，周辺地域の中でどのような役割（例えば，都市なのか村落なのか）を果たしていたのかを明らかにしてゆくのである。

おわりに

西アジアには，世界遺産にまだ登録されていない数多くの遺跡や文化遺産がある。これらの遺産の価値を，研究者だけでなく，一般の人たちにも１つ１つ提示してゆくのが西アジア考古学の大きな挑戦の１つである。

毎年，春から秋にかけて西アジア各地で多くの調査団が地道な作業を進めている。もし，花咲く草原の広がる春，照り返しの厳しい乾燥した暑い夏，さわやかな風が吹き抜ける秋に西アジアの国々を訪れる機会があれば，その国のどこかで文化遺産に関わる大切な作業が行われていることに思いをはせてみてほしい。

インド・東南アジアの世界遺産の魅力

黒河内　宏　昌
サイバー大学世界遺産学部・准教授

インド・東南アジア，そして日本

日本人が最も接する機会の多い宗教といえば，それは仏教あるいは神道ということになる。仏教はインド生まれの宗教だが，インドや東南アジアにも，神道に相当するような宗教がある。それがヒンドゥー教であり，実はすでにたくさんのヒンドゥー教の自然神が，「神仏習合」的に，仏教とともに来日して我々の生活の中に定着している。帝釈天（たいしゃくてん），毘沙門天（びしゃもんてん），弁財天（べんざいてん）…，○○天と名のつく仏教の守護神のほとんどが，インド生まれであることはご存知の通りである。

カンボジアのアンコール・ワット（12 世紀）は，建設当初はヒンドゥー教のヴィシュヌ神をまつり，後世仏教寺院へと変わった，東南アジアを代表する世界遺産の一つである。ここではそのアンコール・ワットを訪ね，実際に中を進むにつれて変化するさまざまの光景とその意味について，私見を紹介して行きたい。

アンコール・ワットの入口

アンコール・ワットに入るには，まず広い堀を渡らなくてはならない（写真 1）。この堀は，正面が約 1300 メートル，奥行きが約 1500 メートル，そして幅が約 200 メートルもある。日本では堀は城郭でよく見るものだが，アンコール・ワットの堀は必ずしも防御用

写真 1　堀を渡ってアンコール・ワットの入口へと向かう

ではない。

天界にいる神に降りてきてもらうために，地上にどのような場所，すなわち寺院をしつらえるかは，実にさまざまであるが，アンコール・ワットの場合，そこは世界の縮図，すなわちミクロコスモスを形作っていたと考えられる。当時のアンコールの人々は，世界は幾重にも海で囲まれているという「世界地図」を想像していた。アンコール・ワットの一番外側をめぐる広い堀は，その海を表していると考えられる。

第１回廊と謎の十字回廊

堀を渡り，最初の門をくぐり，約 350 メートルの参道をまっすぐに進むと，一周約 800 メートルの第１回廊に入る。ここには創世神話の「乳界攪拌（にゅうかいかくはん）」，インド渡来の戦争物語「マハーバーラタ」や「ラーマーヤナ」，そして悪行を戒める内容の「天国と地獄」といった説話が，壁に隙間なく浮き彫りされている（写真 2）。それらは神話と，王が神に認められ強い力を持つということ，そして人間社会のあるべき姿を，詳しく描いている。

第１回廊の周回を終えて正面中央に戻ってきた人々は，次にその内側に歩を進め，十字回廊と通称される空間に入る（写真 3）。十字回廊の当初の機能は不明だが，ある程度水をためることができるような構造になっている４つの中庭があり，そこに降りるための階段も備えている。そこは神と人が触れ合うことのできる，一種の沐浴場のような場所だったのかもしれない。またアンコール・ワットがヒンドゥー教寺院から仏教寺院へと転換した頃には，たくさんの仏像が十字回廊に置かれ，副次的な本堂として使われていた。そこにはかつてアンコール・ワットを訪れた江戸時代の日本人・森本右近太夫が書いた墨書もあり，十字回廊が落書きの許されるような，比較的庶民的な礼拝場だったことを物語っている。

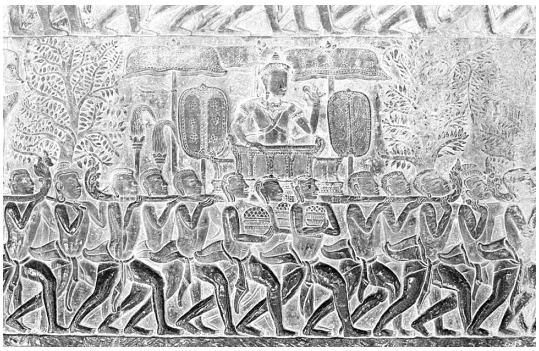


写真２　第１回廊浮彫りに見る建造者
スールヤヴァルマン２世王

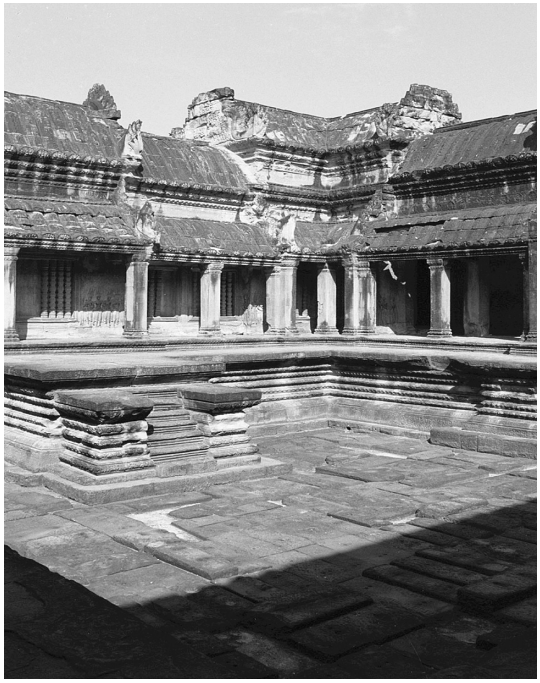


写真３　十字回廊の中庭（池）
雨が大量に降ると池になるという

第 2 回廊

この十字回廊を抜け，急勾配の階段を昇ると，第 2 回廊へと進む。急勾配の階段は，そこを上る人間に，聖域が深まっていくことを予感させる。第 2 回廊には浮き彫りはなく，先ほどめぐってきた第 1 回廊と，そしてこれから上る本堂が乗る岩山のような背の高い基壇とを，窓越しに眺めながら囲繞する。本堂の基壇を昇る階段は，ロッククライミングに近い急傾斜で，そこから先が安易に近付くことのできない，神が降臨する場所であることを暗示している（写真 4）。

写真 4　中央右は第 3 回廊の塔
その左は本堂の塔

本堂とその周辺

アンコール・ワットで最も高いところにある第 3 回廊は，吹き放ちの構造で，周囲の森やそのはるか先まで見渡すことのできる場所である。インド・東南アジアの仏教・ヒンドゥー教寺院には，しばしばこうした自然と一体となる空間がつくられるが，それはあたかも「梵我一如」を物語るかのようである。かたわらには，等身大よりやや小ぶりの女神の浮き彫りが，いくつも彫られている（写真 5）。この女神像はアンコール・ワットの全域に 1700 体以上あるとされており，入口から本堂に至るまで，あらゆる場所で礼拝者を見守っている。

その第 3 回廊に囲まれた中心部には，本堂と，そしてその周囲に 4 つの中庭がある（写真 6）。本堂の重要性はもちろん言を待たないが，ここで注目したいのは中庭である。先ほど十字回廊で見た 4 つの中庭と，デザインがとても良く似ているのである。十字回廊と本堂は，同じ世界を表しているのではなかろうか。

アンコール・ワットにはかつてさまざまの階級・地位の人が礼拝に訪れたことであろうが，近代以前には，すべての人が同様に寺院

写真 5　第 3 回廊の女神像たち（人の背丈よりやや小）

の中を行き来できたとは考えにくい。本堂まで来ることを許されなかった多くの庶民が，神や仏と触れ合うための場所が，十字回廊だったのではなかろうか。十字回廊と本堂のデザインの繰り返しは，それを物語っているように筆者には感じられる。アンコール・ワットは，王が神から承認を受ける本堂＝中心空間と，庶民が神の恵みを分け与えてもらう十字回廊に代表される周縁空間の，入れ子状の空間構成になっていると考えられる。

写真 6　本堂（左）の周囲にある中庭（池）
十字回廊のそれと似ている

インド・東南アジアの世界遺産への招待

インドや東南アジアには，このように不思議で，魅力的で，さまざまに思いをめぐらすことのできる世界遺産が数多くあります。いつか機会がありましたら，ぜひ訪問されることをお勧めいたします。

古代エジプト文明の魅力

吉　村　作　治
サイバー大学世界遺産学部・教授

3千年間続いた古代文明

古代エジプト文明の魅力の第1は何といってもその文明の古さであろう。古代文明では最古の文明はメソポタミア文明の中のシュメール文明ではあるが，残っているものが非常に少ない上に文明の規模が小さい。もともとメソポタミア文明は都市国家の文明なので，その領土も狭く人口も少ない。それに対して古代エジプト文明は国全体が文明に関わっているし，人口もピラミッド建設の時代で推定300万人ほどだったといわれている。すなわち文明力が格段に上なのである。古代エジプト文明を支えていた王国は，今から5千年前にナルメル王によって統一された。それ以降ローマ帝国の属領になるまでの3千年間は「王朝時代」とか「ファラオの時代」とよばれ，繁栄していた。統一以前の約千年を「先王朝時代」とよんでいるが，その時代に文明の基礎が築かれたと言える。王朝を統一した王がナルメル王だとわかるパレット（儀式用化粧板，写真1）や，歴代のファラオの名前が刻まれている王名表（写真2）などの統治者名やその統治の様子がわかる文献等の記録が多数残っている。文献資料だけでなく，彫像やレリーフ，絵画など美術資料も豊富で，生活のようすが手にとるようにわかる。古代エジプト文明へアプローチする方法は，文字

写真1　ナルメル王のパレット（カイロ・エジプト博物館蔵）

写真2　セティ1世葬祭殿の王名表（アビドス）

資料からだけでなく，美術，建築史からもアプローチできるところが古代エジプト文明の強味であろう。

巨大建造物の文明

次に巨大物の文明だということもその魅力のひとつであろう。何といっても地上147メートル，底辺230メートルというギザ台地にあるクフ王の大ピラミッドをはじめとして，カフラー王のピラミッドなど巨大建造物がエジプト全土に所狭しと建っている。数から言ったら，ルクソールのカルナク大神殿（写真3）をはじめとする，神殿や葬祭殿はその数200基を超える。カルナク大神殿は東京ドームが数個も入るくらいの広さで，きちんと観ようと思ったら1週間はかかると言われている。そこから出土した彫像をはじめとする出土品は千点をこえている。又，お墓となると，エジプト全土では万をこえるであろう。ルクソール市の西岸，クルナ村ですら，3千点をこす貴族墓が今までに発見され，発掘されている。私たちの調査隊はここ40年間で3千点をこす出土品を掘り出し，日本で『吉村作治の早大発掘40周年展』と題して巡回展を行っているほどだ。

写真3　カルナック大神殿の第1塔門とスフィンクス参道

世界一出土品の多い文明

第3の魅力はその出土品の多さである。その数といい，種類といい古代文明の中では群を抜いている。個数で言うとエジプト国内に100万点余，近世に海外に流出したもので100万点とあり世界一の数だ（写真4）。イギリスに行っても，フランス，ドイツ，アメリカ合衆国，どこへ行ってもエジプトモノはその地の博物館の目玉である。私も各国をまわってエジプト・コレクションを調べているが，マスターピースをみるのが精一杯といった状態だ。種類も日用品からはじまって，神々への供物，アクセサリー，葬祭用品，道具，建

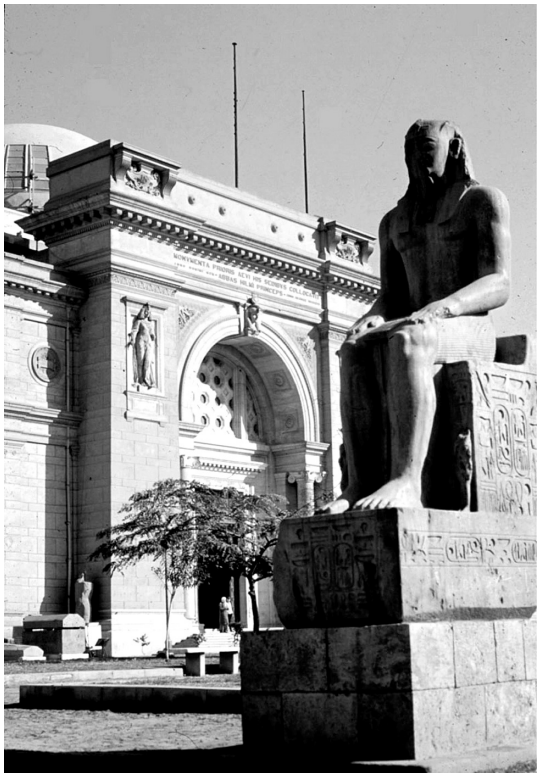


写真4　世界一のエジプト・コレクションを誇るカイロ・エジプト博物館

材や装飾品，彫刻をはじめとする美術品などこの世であろうと思われるもの全種類のものが出土している。その上それらの物の造形の美しさ，色彩のよさ，仕上がりの細かさが，巨大文明の作とは思えないほどだ（写真 5）。どれひとつをとっても家の飾りとして申し分ないが，古代エジプト人はそれらをインテリアとか美術品として造ったのではなく，日常使用し，それらをあの世へもっていこうと考えて作ったのである。中にはあの世に住んでいる神々への贈り物として作ったものも少なくない。

写真 5　ラーヘテプとネフェルトの彫像
（カイロ・エジプト博物館蔵）

豊富な文字資料を誇る文明

第 4 の魅力に文字資料が多い故に古代エジプト文明がよく解明されていることがある。例えば神殿や葬祭殿，墳墓といった葬祭に関わる建造物には，レリーフや絵画，彫刻，記念物にこれでもかと言わんばかりに説明文が刻まれている（写真 6）。古代エジプト人は説明魔である。が，これといったものについては全く解説がない。例えばピラミッドの造り方，建造目的など宗教と深く関わっているにもかかわらず記録がない。そのため，数多くのエジプト学者が輩出したのだ。古代エジプトの謎とか，ピラミッドのミステリーとよばれる謎解きが絶えないのは，この理由からくる。

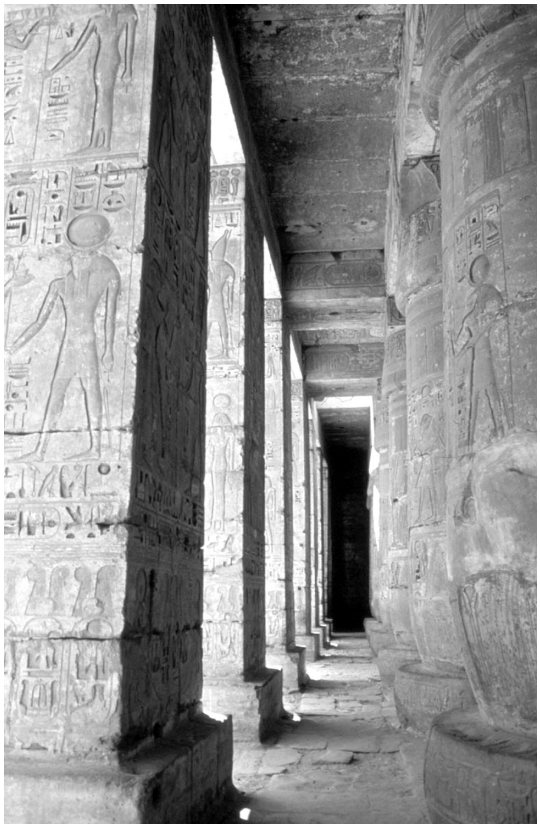


写真 6　壁，柱，天井までもがレリーフで埋め尽くされている（メディネト・ハブ神殿）

キリスト教の死生観の起源

第 5 に，古代エジプトの宗教観がある。というのも，ユダヤ教もキリスト教もイスラム教ですら，その根源は古代エジプトの宗教にある。一見その 2 つのグループは多神教と一神教と全く違うようにとらえている人も少なくないが，自然を崇り，死して人の魂が復活し，永遠にあの世で行き続けるといった死生観の起源は古代エジプト文明にある（写真 7）。そして，ギリシア文明にしても，ローマ文明，ビザンチン文明，サラセン文明といった西欧

の文明のもととなっているのである。中世から近世にかけての西欧文明はキリスト教の理解なくしてはわからないと言われているが，実は古代エジプト文明を知ることなくキリスト教文明はわからないのである。古代エジプト文明の魅力はこれ以外にも多々あるが，その大もとになる。復活・再生の思想からくる循環型の死生観を理解すると，今日の文明を知ることができる。

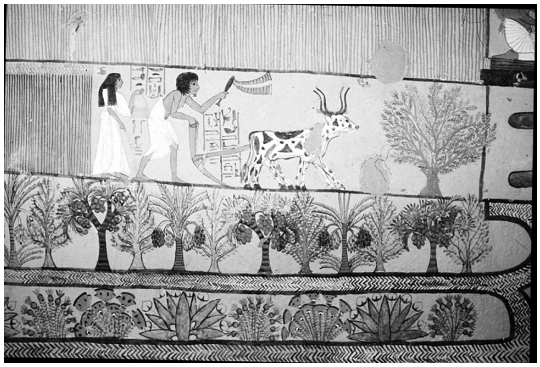


写真７　来世の様子を描いた壁画（センネジェムの墓）

ピラミッドへの問い

菊　地　敬　夫
サイバー大学世界遺産学部・准教授

ギザのピラミッド

古代エジプトの世界遺産のなかから，ピラミッドで有名なギザ遺跡を紹介したい。ピラミッドは，古代から今日まで文明の垣根を越えて人類に驚嘆，感動，そして謎を与えてきた。やはり古代エジプト文明を象徴するものは，ピラミッドであろう。しかし，おそらく世界中で最も名の知られた世界遺産であるにもかかわらず，その全容の解明がなされていないことも事実である。

ギザ遺跡にあるクフ王のピラミッドは，高さ 147 メートル，基底部の長さが 230 メートルを測るエジプト最大のピラミッドである。この巨大なピラミッドを，今からおよそ 4560 年前の古代エジプト人はどのようにして建設したのであろうか。ファラオの建築家が描いた設計図や建設にまつわるエピソードを刻んだ記念碑はまったくない。そのため古代から様々な説が唱えられてきた。

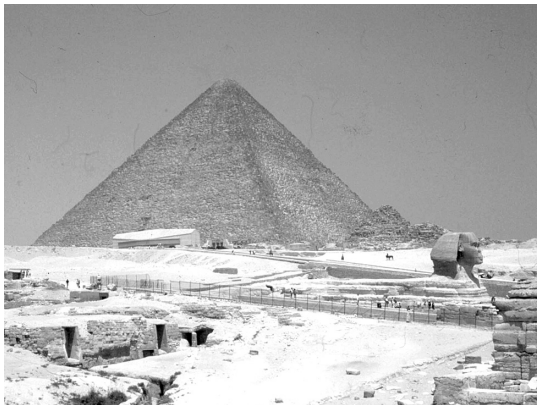


写真 1 クフ王のピラミッドとスフィンクス

ヘロドトスとの知恵比べ

紀元前 440 年ごろにエジプトを訪れたギリシアの歴史家ヘロドトスは，ピラミッドの石は材木で組み立てた引き上げ機械でピラミッドの上へと運び上げたという伝承を記している。しかしこのような装置は古代エジプト文明をとおして使われていた証拠がみられない。

では他にどのような方法が考えられるのであろうか。仮説は多々あるが，まずはクフ王のピラミッドにどれだけの石が使われているのだろうか。実は，クフ王のピラミッドに使われている石の数は，正確にはわかっていない。一説には 230 万個，それより 70 万個も多い 300 万個という推定もある。現代の科学技術を用いても，石灰岩のブロックを水平に積み上げて造られているピラミッドの内側は，正確に覗くことができないのである。

仮に積み上げられている石の数を 230 万個とすると，これだけの石を切り出して運び，

正確に積み上げるのにはどれだけの時間を要したのであろうか。この疑問には，視点を少しかえてみると興味深い仮説を導き出すことができる。

古代エジプトのファラオは，王位に就くと自らのピラミッドの建造に取り掛かった。それゆえ最大のピラミッドであるクフ王のピラミッドも，王の在位期間に設計施工されたことになる。ではクフ王はどれだけの期間，王位に在ったのか。クフ王から約 1300 年後のラメセス 2 世の時代に書かれたパピルス文書によると，クフ王は 23 年間にわたってエジプトを治めていたことがわかる。

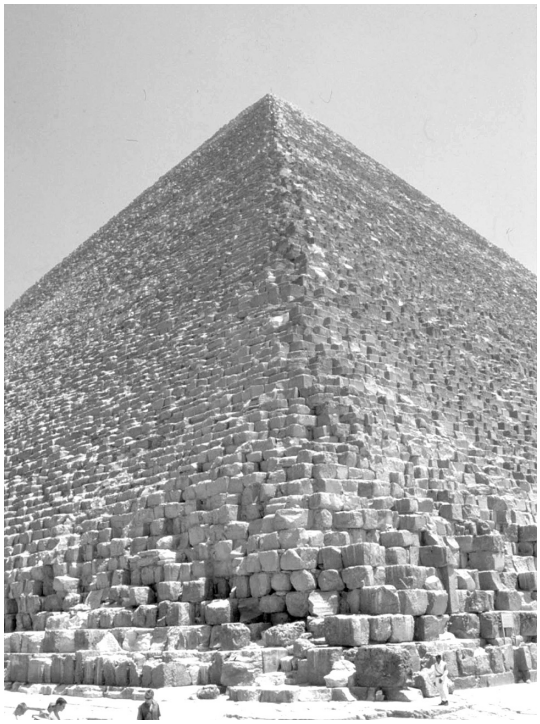


写真 2 力強いフォルムをみせるクフ王のピラミッド

ピラミッド建造現場

そこで計算するとピラミッドの石は 1 年で 10 万個が積み上げられ，一日では約 300 個がすえられたことになる。労働時間を一日 10 時間と仮定して，1 個で重さ約 2.5 トンのブロックをこれだけの数積んでいく作業では，ピラミッドに 2 分に 1 個のペースで石がすえられたことになる。これは，よく統制の取れた労働者がピラミッド建造に当たっていたことを物語る。

ピラミッド建造現場では，作業の指示が正しく迅速に伝わるような組織ができていたことだろう。そうでなければ 2.5 トンもの石を人が何人集まろうと，ピラミッドに積み上げることはできなかったはずである。このような体制は，エジプト各地の小さな共同体で育まれてきた組織を，巨大なピラミッドを建設するという国のプロジェクトに取り込むことで整備されたのではないだろうか。

写真 3 ピラミッド基底部の石積み。重さ約 2.5 トンの石灰岩ブロックからなる

写真 4 ギザ三大ピラミッド。左からクフ，カフラー，メンカウラー王のもの

ピラミッドのある風景

次に，完成したピラミッドを眺める立場になって考えてみたい。今では，カイロ市内から車でギザに向かうと渋滞を抜ける前に，立ち並んだビルの背景にピラミッドの三角形の姿が目に入る。

これは古代エジプト人が見ていたピラミッドを含む景観とある意味変わってはいない。かつても人々はナイル川沿いに王宮や町をつくり暮らしていた。そこから人々の暮らしの場はナイル川の水が及ばない砂漠の縁まで伸びていた。そしてナイル川の氾濫原に張り出した砂漠の突端部に，今と同じくクフ王のピラミッドがあった。

さらに視点をかえてみると，ピラミッドは見渡す限りの地上が，その上に広がる果てしない天空と接する「小さな」交点であることに気がつく。すでに紹介したように底辺 230 メートル，高さ 147 メートルという巨大なクフ王のピラミッドも，広がる土地と天空の間では，どうにか両者をつなぎとめるような，太陽の光を受けて耀く小さな物体でしかない。

地上と天空が交わるところ

今日，私たちはピラミッドの巨大さばかりに目を奪われる。しかし地上と天空という自然圏のなかで，地上から天空に溶け込むように並ぶギザ遺跡の三大ピラミッドをもう一度見直してみたい。するとピラミッドがまさにエジプトと自然圏を結ぶ交点となっているのがわかるだろう。

クフ王のピラミッドは底辺が正確に東西南北に面して建造されている。またかつては太陽の光をそのまま反射する白色の外装石で仕上げられていた。これは古代エジプト人がピラミッドを太陽が昇り，その光が射す自然圏の中に築いたことを良く示している。

そして何より，大きく高くというクフ王のピラミッドに結実した設計理念は，彼らが果てしない宇宙の中で，地上 ── 人間の世界 ── と天空 ── 神々の世界 ── を結びつけるために，安定し，永遠に崩れることのないものを希求していたことを想起させる。

ピラミッドは，これからも世代を超えて意味を問い続けられることだろう。そして，その問いを重ねることで，ピラミッドという世界遺産は確かに継承されていくのである。

遥かなるマヤ文明を訪ねて

中　村　誠　一
サイパー大学世界遺産学部・教授

マヤ文明の栄えた地，中央アメリカ

メキシコの南に位置する中央アメリカの国々。パナマまで続く狭い地峡帯の中に，小さな国がいくつも隣り合っている。「この辺は国の位置関係がどうもよく分からなくて…」という方が，日本では多いのではなかろうか（地図）。

中米まで，日本からは太平洋を越えて飛行機で 15 時間くらいかかる。直行便はなく，アメリカかメキシコで乗り換えなければならない。しかし，ここにはマヤ文明というロマンあふれた古代文明の遺産が数多く残っている。数多くの日本人に，一度は訪れてほしい地である。

地図　中央アメリカ諸国地図

かつてマヤ文明が栄えた中米の一部は，「マヤ地域」と呼ばれている。メキシコの南部からグァテマラ，ベリーズ，そしてホンジュラスとエル・サルバドルの西部まで 5 ヶ国にまたがり，総面積は日本の国土全体から四国を除いた程度の広さである。

マヤ地域は，海沿いの低湿地から標高二千から三千メートル級の火山帯が連なる高地まで，実に多彩な自然生態環境に囲まれている。カリブ海沿いの美しい海岸があると思えば，グァテマラ北部の内陸地帯には，一転して人が足を踏み入れることさえ困難なジャングル地帯が広がる。高地には，現在でも八百万を超えるマヤ系の言語を話す人たちが住んでおり，その衣装はとてもカラフルで鮮やかである。マヤとは現代に生きる文化でもあるのだ。

この地に，紀元前 400 年頃から 16 世紀にスペイン人たちが征服に訪れるまで，約二千年にわたって花開いたのが，マヤ文明である。

マヤ地域で最も美しい世界文化遺産 ── パレンケとコパン

このマヤ地域の北西と南東の両端に，マヤ研究者を感動させてやまない世界文化遺産が

写真 1　パレンケの「碑銘の神殿」を望む

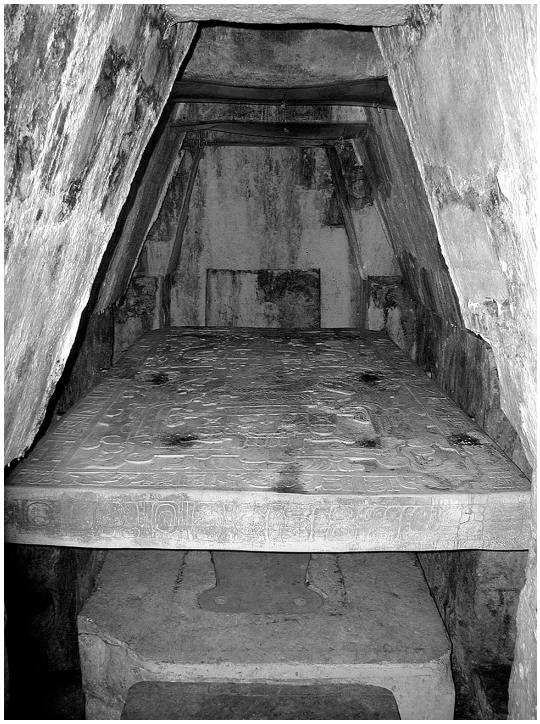


写真 2　碑銘の神殿内部にあるキニチ・ハナーブ・パカル 2 世の墓室

ある。古典期（紀元 250〜900 年）に栄えたメキシコのパレンケとホンジュラスのコパンである。数多いマヤ都市遺跡の中でも「最も美しい都市」という称号を競い合っているこの二つの遺跡は，直線距離でも 500 キロ近く離れている。

マヤ地域北西に位置するパレンケは，マヤ文明のピラミッドの内部に「王墓」があることを初めて証明したことで有名な遺跡である（写真 1）。メキシコ人考古学者アルベルト・ルース博士によるキニチ・ハナーブ・パカル 2 世の王墓発見物語は，エジプトのツタンカーメン王墓発見物語と同じく，マヤ考古学者を志す者たちが胸をわくわくさせながら読む話である（写真 2）。

パレンケには，他のマヤ都市のように支配者や碑文の刻まれた石碑，祭壇が見当たらず，その代わりに建造物のファサードを飾る漆喰レリーフの彫刻が有名である。近年でも，マウンドとなった大きな建造物址の発掘調査が進むにつれて，往時の色彩を残す見事な漆喰レリーフの装飾が次々と見つかっている。その一部は，現場に展示されているが，思わず引き込まれそうになるほど美しい芸術作品である。

一方，マヤ地域の南東に位置するコパンは，王朝初期から中期にはパレンケと同じように漆喰レリーフの彫刻で建造物のファサードを飾っていた（写真 3）。しかし 6 世紀後半から徐々に石造彫刻による装飾にかえ，8 世紀には古典期マヤ文明を代表する石彫芸術の数々を生み出すようになった。

写真 3　コパンの石彫博物館にあるロサリラ神殿のレプリカ

古代マヤ社会には青銅器や鉄器といった金属器が存在しなかったため，古代マヤの人たちは，石の道具でこれらを造ったのである。他のマヤ都市では，そのため彫りの浅い彫刻

品が作られたのだが，コパンの芸術家たちは，8 世紀にはいると高浮き彫り，丸彫りと呼ばれる独特の立体的な彫刻を生み出すようになる。細部の彫り方など，驚異的な技術である（写真 4）。

興味深いことに，コパンに残された碑文には，コパン最後の王が自分の母親はパレンケ王家出身であると述べている（Schele and Freidel 1990）。こんなに離れた二つの都市の王家間に，まさか婚姻関係が存在していたとは，碑文が残っていなければ誰にも想像できなかったに違いない。

しかし，もっと驚くべき発見があったのである。それは，このパレンケ王家出身の女性が，はるかパレンケからコパンまで嫁入りする際に身に付けていた碑文入りのヒスイ製腰飾りが見つかったのだ（*ibid*）。偶然，発見される一つ一つの考古遺物が碑文の内容を確証し，歴史を甦らせる。はるか昔のことに思いをはせるのは本当に楽しいことである。

写真 4　コパンの大広場にある高浮き彫りで彫られた石碑 B

マヤ文明の中心 ── 世界複合遺産ティカル

この両者の中間にどっしりと存在するのが，グァテマラの密林地帯に存在する世界複合遺産のティカルである。ここは 576 平方キロの広さをもつ国立公園になっており，密林の中に古典期マヤ文明最大の都市遺跡が眠っている（写真 5）。ジャングルの中から頭を出す石造の神殿ピラミッド群は壮観だ。

ティカルには，これまでに発掘された 3 つの神殿ピラミッドのほかにも，数多くのピラミッド状建造物が存在している。これらが発掘されて，マヤ文明の知られざる歴史に光があたるのは，いつの日のことだろうか？

各地の都市遺跡が独自の美を競い合うマヤ文明。一人でも多くの日本人に現地でその美しさを見ていただきたいと願っている。

写真 5　ティカルの 1 号神殿

参考文献

Schele, Linda. and David Freidel, 1990, *A Forest of Kings : The Untold Story of the Ancient Maya.* New York.

無形遺産としての日本の祭り

瀬　戸　邦　弘
サイパー大学世界遺産学部・助教

愛され，受け継がれる風景　祭り

秋田の竿灯まつり，唐津くんち，長崎の精霊流し…わが国には誰もが知っている祭りや年中行事が数多く存在し，枚挙に暇がないほどである。また各地域で営まれる小さな祭りもあわせると 365 日，日本中のどこでも祭りが行われているといって過言ではないだろう。つまり「日本は祭りにあふれている」といえるのである。では，なぜ日本人はこんなに祭りを行うのか。祭りとは我々日本人にとって何であろうか。

お祭りとは？

「まつり」という言葉はそもそも「まつる」にその語源を持つといわれ，そもそもは神を祀ること，またはその総体としての宗教的儀式を指すと考えられる。一般的に祭りにおいては，開催日にあわせて関係者が自らの行いを慎み，身を清め，その後神仏・祖先に供物をささげ祈願がなされる。そして願いが成就したあかつきには，感謝の意が表されることになる。また祭りは家族，親族，村落共同体などさまざまな規模で行われるので，その目的もさまざまである。たとえば村落共同体の場合，人々の共通の願いである豊作や豊漁

写真 1　秋田の竿灯まつり
毎年 8 月の第一週に行われ，夜空を竿灯の提灯があざやかに浮き上がる。

写真 2　唐津くんち
唐津神社の秋季例大祭で約 400 年の歴史を持つと言われる。

が祈願され，また個人的な願いの場合は無病息災や，商売繁盛等などがその目的となる。

ところで，最近では，新たに創られるイベントにも「祭り」という名前がつけられることが多く，その解釈・定義の仕方にも広がりが生まれてきている。

写真 3　長崎・精霊ながし
当日は爆竹の破裂音の喧騒の中，精霊船が町を進む。

祭りの持つ役割・機能

ところで，そもそも祭りは非日常に位置するものであり，日常から非日常を通過し日常に戻る過程を経て成立する。祝祭の展開される非日常の場面では，秩序の崩壊に伴い暴力的行為や日常との役割の逆転なども起こる。そして，無秩序を経験した共同体は日常に戻った際に，あらためて平素の枠組みのあり方を意識・認識し，新鮮な秩序として日常の枠組みを受け入れることとなり，共同体内における“秩序の強化”を図ることができるのである。

日本の祭りの一例：春迎えの行事　岡山県西大寺観音院　会陽（裸祭り）

岡山県岡山市西大寺観音院では毎年 2 月の第三土曜日の夜から日曜日の未明にかけて，二本一対の宝木を 9000 人ともいわれるしめこみ姿の男たちが力の限り奪い合う。この宝木争奪戦を中心としたお祭りを会陽（えよう）と呼ぶ。西大寺の会陽は約 500 年の歴史があると言われ，県の無形民俗文化財に指定されている。見事宝木を手に入れる事ができた場合“福男”として一生の名誉と幸せを手に入れることができると考えられており，この地域の人々には重要な祭事となっている。

会陽の準備は会陽事始式に始まるが，その後「宝木取り」という行事が行われる。この行事は観音院から数キロ離れたお寺に使いの方が宝木の素材を預かりに行く行事の事を指すが，実はこの行事は現代的な価値観とはそぐわない決まり事により受け継がれている。実はこの行事，道中は一切無言を通すという決まりにしたがって行われているのである。「宝木に「魔」が入らないように」との思いから受け継がれるこの作法，この行事に限らずさまざまな伝統的な作法に則り，護られ作られた宝木は福をもたらす象徴として，民衆の頭上に投下されるのである。

写真 4　会陽・宝木争奪戦
9000 人にも及ぶしめこみ姿の男たちが宝木を奪い合う

写真 5　宝木取り
無言の行を守りながら，宝木取りは粛々と行われる。

写真 6　大床
2 月の第 3 土曜日の深夜，床の上でた宝木取りが行われる。

無形の文化財・無形遺産の護られ方

日本では，無形の文化を演劇，音楽，工芸技術などの「無形文化財」，衣食住，生業，信仰，年中行事等に関する風俗慣習，民俗芸能など人々が日常生活の中で継承してきた「民俗文化財」と定義して保護している。また，国際的なレベルでは，ユネスコによって取りまとめられた「無形文化遺産の保護に関する条約（無形遺産条約）」が 2006 年 1 月に発効している。この条約は民俗文化財，フォークロアなど「無形の文化」を人類共通の遺産としてとらえ，保護していくことを目的としているのである。国の内外を問わずに無形の文化財・文化遺産の保護意識が高まり，保護活動がなされているのである。

祭りを学ぶことの意味

会陽にて宝木を手に入れたものは福男となり，一生の名誉と福を手に入れることができる。この考え方は基本的に実修地域の人々にのみ共有される価値が体言化されたものだが，当該地域の人々が作り出し，護り，受け継ぐ価値の体系を“文化”と呼ぶならば，祭りとはまさに「文化の可視化装置」なのである。

つまり，祭りとはその地域の人々が共有する普段は目に見えない価値や考え方を目撃できる瞬間といえるのである。したがって祭りは，まさに実修者たちのアイデンティティを創出・確認・再生産する重要な場であり，他者にとっては，実修者が如何になる価値体系の下に生活しているのかを理解できる場であるといえるのだ。本稿のはじめに「日本人はなぜこれほど祭りを行うのか？」という問いを立てたが，実はこの問いは日本に限るものではない。

皆さんもご存知のように，世界中の到るところで祭りが営まれ，文化が受け継がれている。それでは日本の祭りを考えることの意味は何であろうか。その理由は，祭りを通して「日本，ひいては日本人そのもの」について考えることだと私は考える。「日本とは…，日本人とは…」あまりにも望洋なテーマではあるが，我々は，祭りを通してこの国に住む自分について考えることができる，祭りとはそういったものであると思う。

日干し煉瓦の魅力

柏　木　裕　之
サイバー大学世界遺産学部・准教授

日干し煉瓦の国・エジプト

エジプトといえばピラミッド。巨石を積み重ねた姿は今も昔も人々を圧倒する。その印象があまりに強烈なためだろうか，エジプト＝石の文化と捉える人が多いように思われる。確かに観光ルートに含まれる遺跡は石造のピラミッドや神殿が多く，見栄えが必ずしもよくない日干し煉瓦の遺跡は訪れる人も少ない。しかし少し目を凝らしてみると，日干し煉瓦で作られた王のピラミッドを見つけることができるだろうし，石造の周囲からは多数の日干し煉瓦の建物を発見できるはずだ。

石が日干し煉瓦よりも頑丈な建材であることは事実であり，誰しもが石を利用できたとは思われない。しかし，だからといって日干し煉瓦が劣った建材であり，それを使うことは貧しく，恥ずかしいことだという意識があったかは疑わしい。むしろ日干し煉瓦は古代の人達にとって馴染み深い，ごく普通の建築材料であり，石の方が特別な存在であったとみなすのが適当だろう。その意味で，エジプトは日干し煉瓦の国と言うべきかもしれない。

写真１　日干し煉瓦で作られたエジプトのピラミッド

日干し煉瓦の作り方

日干し煉瓦は，粘土に砂や「すさ」などを混ぜ，木の型枠に入れて作る。型枠から抜いた後は天日に干して出来上がり。2，3 人がかりで一日に 1000 個ほど作ることが可能だ。ちなみに，これを焼くと日本でよくみる赤煉瓦となる。焼成した煉瓦のほうが丈夫ではあるが，雨がめったに降らない地域では，燃料となる木や薪を集めることが難しく，大量の煉瓦を高温で焼く窯を用意することも大変であったに違いない。このため手軽に量産できる日干し煉瓦は，古代エジプトに限らず，西アジアや中国，アメリカ大陸など世界中で広

写真２　日干し煉瓦の製作風景

く使われた。古代エジプトの場合，原料の粘土としてナイル川が運んでくる泥が用いられ，そのため日干し煉瓦のことを泥煉瓦とよぶ時もある。泥はほぼ無尽蔵に入手できるといってよく，天日に干せば出来上がりとなれば，広く普及したのも当然といえよう。

なお，日干し煉瓦のことを「アドベ」と呼ぶ地域があるが，これは日干し煉瓦を「アル=トゥーブ」と発音するアラビア語が伝わったもので，遡ると古代エジプトの言葉に起源を求めることができる。

日干し煉瓦の遺跡を調べる

エジプトで遺跡の発掘を行うと，中心となる建物が石造であれ，岩山を穿った岩窟造であれ，必ずといってよいほど周囲から日干し煉瓦の遺跡が発見される。多くの場合，壁の足元だけが数段確認できるほどの悪い状態で，周囲から煉瓦が散乱して発見される時もある。これは砂混じりの強風が壁の足元に吹き寄せ，壁をえぐり取った結果，壁が足元から倒壊したためと想定される。

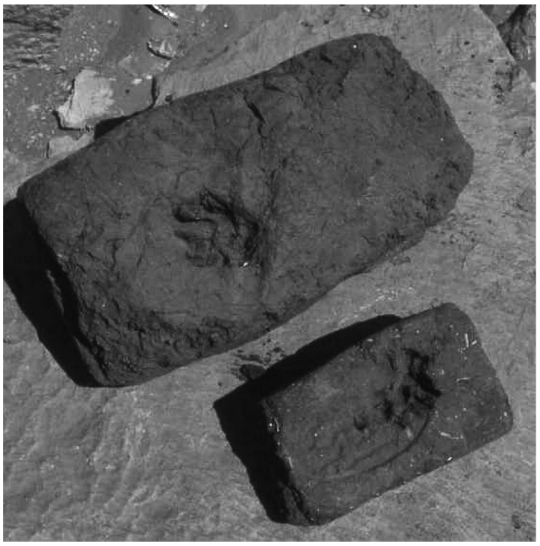


写真３　小動物の足跡が押された古代（大）と現代（小）の日干し煉瓦

こうしてバラバラに散らばった日干し煉瓦。無用の長物に思われるかもしれないが，発掘に携わる者はこれらを一点一点手に取り，そこに「スタンプ」が押されていないか舐めるように確かめる。現在の煉瓦でも表面に製造した場所を刻印するように，古代においても煉瓦に人の名前などが押される場合があり，遺跡が作られた年代や持ち主などを推定するうえで，大きな手がかりとなる重要な資料なのだ。スタンプ探しは地味で根気のいる作業だが，時々スタンプではなく，動物の足跡がついた煉瓦が見つかることもある。学術的にはほとんど価値のない痕跡であろうが，生乾きの煉瓦の上を小動物が横切り，大声を上げながら蹴散らす煉瓦職人の姿を想像するのは，ちょっと楽しい幕間の余興のようで，ついつい手を止めて微笑んでしまうのである。

日干し煉瓦の遺跡

日干し煉瓦の遺跡がエジプトのガイドブックに取り上げられることは少ないが，例外的に紹介されるのが，ルクソール西岸のラメセウム（ラメセス２世葬祭殿）である。ここには日干し煉瓦で造られた倉庫が残り，レンガによるヴォールト天井がいまも良好に観察できる。

ヴォールトというのはアーチを同じ方向に並べたトンネル状のことで，ちなみにアーチの頂点を持って，一回転させるとドームができあがる。

基本となるアーチを造るためには，通常まず半円形の型枠が用意され，その上に煉瓦が弧を描くように並べられる。煉瓦同士の接着にはモルタルが使われ，これが乾いたら枠を外して完成となる。型枠にはふつう木が使われ，大きなアーチを架けるためにはそれに見合った木材が必要となるが，乾燥地域では木は高価で，十分な量を入手することも難しい。

ラメセウムのヴォールト天井をよく見ると，一つ一つのアーチは隣のアーチにもたれかかるように傾いている。ちょうどドミノ倒しをした時のようだ。そして一番端に壁を建て，この壁が寄りかかったアーチの重さを支えている。逆に言えば，まず壁を築き，そこにアーチを傾かせながら築くことによって型枠を使わずにヴォールト天井を完成させることが可能となる。型枠なしのヴォールト天井である。

写真４　ラメセス２世葬祭殿（ラメセウム）に残る日干し煉瓦のヴォールト

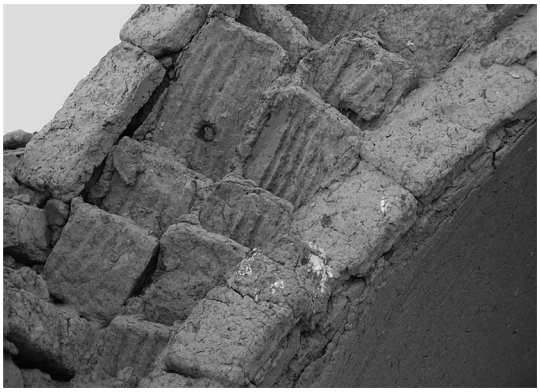


写真５　筋が付けられたヴォールト用の薄い日干し煉瓦

またこのヴォールト天井をよく見ると，重さを減らすために薄い煉瓦が用意され，さらに煉瓦の表面にはモルタルがしっかりと食いつくように，指で筋が付けられている。ただ煉瓦を積み重ねただけに見える煉瓦造だが，よく見るとさまざまな知恵と工夫が働いており，意外に面白いものなのである。

日干し煉瓦の可能性

調査隊員が寝泊りする宿舎はこの日干し煉瓦で作られている。砂漠の冬の夜は５℃あたりまで冷え込むが，日干し煉瓦が昼間に蓄えた熱を，夜にゆっくり放出してくれるため，

写真 6　日干し煉瓦で作られた早大調査隊宿舎

朝まで 20℃ほどの暖かな空気で体を包んでくれる。この宿舎で寝泊りした人は例外なく，日干し煉瓦住居の快適性に驚き，その良さを認識する。

しかし，日干し煉瓦の家は，ひとたび地震が起きると甚大な被害をもたらすことも事実だ。雨や風に対する耐久性や，高層化など解決しなければならない問題も山積している。それでも，泥を固めただけの日干し煉瓦は要らなくなれば簡単に壊すことができ，生じた廃棄物も畑に戻せば肥沃な土として活かすことができる。今風に言えば，リサイクルが可能で，シックハウスにも無縁の，環境に優しい建材となりえよう。日干し煉瓦を含む土の建築は，もう一度見直されてよい建材ではないかと考える。

どうだろう，久しぶりに泥団子でも磨いて，土の可能性に思いを耽ってみては。懐かしい，忘れかけていた何かが甦るのではないだろうか。

西洋建築の見かた

西　本　真　一
サイパー大学世界遺産学部・教授

建築の起源を問い直してみること

人間がどのような過程を経て人間になったかは，建築の世界でも重要な問題である。猿と同族であったと思われる最初の人間たちは，自分たちが住むための家を造るようになり，それどころか死者のための住み処である墓までもこしらえるようになった。これが建築の始まりである。今を遡ること遙か昔，圧倒的な猛威をふるう自然の存在に初めて気づいた原始の人間たちは，しかしあきらめるということをしなかった。自分がきわめて弱い立場の生き物であることを正しく認識し，また決してこちらの思い通りにはならない対象を理解するために，授かった知恵に従って，大いなる自然との間を取り持ってくれる崇高な介在者を考えつく。これが宗教の始まりを意味する。最初の建築は，こうして誕生した宗教に仕えるかたちで造られていく。建築はだから，人間の起源と同じくらい古い時代に生まれたと考えても差し支えない。建物は，周囲の環境で豊富に見受けられる素材を用いて建てるというのが世界に共通した一般的な傾向ではあるけれども，格別の意味を持たせたいものについては，やがて不変の建材である石を使い始める。

初めて造られたピラミッドの試み

今からおよそ 5000 年前に，初めてのピラミッドがエジプトで建造された。この建物はまた，世界で最初に造られた本格的な石造建造物でもあった。そこでは長い年月が経っても滅失することのない「建築の不死」が望まれていたとみなすことができる。現世において永遠に生き残るように造られた，きわめて特殊な建築である。最高権威の地位にある者が，建築を用い，現実世界の限界を越境しようとした始まりでもある。「階段ピラミッド」と呼ばれる，非常に特異なその外観は，地上から空に向かって聳え立っている（写真 1)。高台に築かれた印象深い姿は，たぶん遠くからでも良く見えたであろう。どこからでも見えるという建物の新しい造り方は，同時に自然の景観を改変することも意味していたはずである。

このピラミッドは何回かの計画変更を経て造られたことが分かっている。少しずつ底面を広げ，そして高さを増していった建物であった（写真 2)。人工的に高い山を築き上げ

写真１　ネチェリケト王の階段ピラミッド，全景（エジプト・サッカーラ）

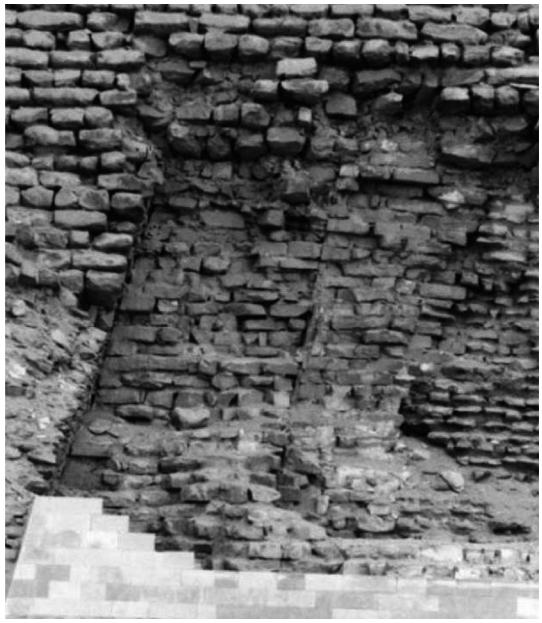


写真２　ネチェリケト王の階段ピラミッド，増改築の痕跡（エジプト・サッカーラ）

る作業に似たこの建築活動は，それまでのエジプト建築の伝統には存在しない。従来は，泥煉瓦を用いて全体に平べったい建物を造営するだけである。まったく新しい建築であったと言わねばならない。

ただ頑丈なだけが取り柄の建築が求められるのであれば，伝統に即した平らな建物の方が有利であったであろうが，彼らはそうしなかった。石で建物全体を造る経験もほとんど持ちあわせていなかったにも関わらず，彼らは決然と，重力に抗って高く立ち上がるかたちを最終的には選び取る。ここに建築を造ることの原点をうかがうことができる。素手で世界の限界をこじ開けようとするのである。実は，計画変更の跡がうかがわれるのはこの建物だけではない。エジプト建築では，まるで造りながら考えたとしか思われないほど，建造の最中に方針を変えているものが多い。ある程度まで建物ができた段階で，より良いものができそうだと判断された場合には，改良案が実行された。時には建造途中でピラミッドの位置を動かすという大胆な変更もおこなわれた。

エジプト建築とギリシア建築との違い

建物を造りながら考え，その都度，計画を変更するという柔軟な方法で 3000 年近くにわたる間，エジプト人は石造建築を建て続けた。しかし試行錯誤を重ねながら理想の建築の姿を探る建造手順は，一方で労力の無駄が多いという欠点がある。この時代，建築技術について何も知らない人間を，とにかく大量に動員はできるという，エジプトの事情にかなった建築の造り方がなされたわけである。エジプト建築とギリシア建築とでは，様式も建造技術も大きく違っていて，エジプトから直接ギリシアが影響を受けたとすぐさま考えることはできない。だが造っては毀し，確かめながら建物を完成に近づけていくという長い歴史によって，エジプトでその体験が蓄積されたのだと考えるならば，ギリシアで見られる完全な建築への熱い願望は，エジプト建築の延長上にあると見ることも可能であろう。

ギリシアの神殿には，建造前から細かく充分に検討を重ねて造るという大きな違いがあった。柱に架け渡された梁の上に並べられる部材を等間隔に配置するために，かなりの情熱を傾けたふしが見られる。アクロポリスの丘の上に立つパルテノン神殿（写真 3）はその典型である。離れて眺めた時，基壇や梁が直線に見えるように，わずかに曲線を採り入れるなど，精妙な工夫が凝らされたことは広く知られている。

写真 3　パルテノン神殿（ギリシア・アテネ）

ローマ以降の建築の課題

ローマ建築は，ギリシアでうかがわれる建築への姿勢を尊重する一方で，ギリシアの時代にはなかった公共建築をたくさん生み出した。ローマ建築の面白さのひとつは，多岐にわたる一般民衆のための建物を味読する点にある。コロセウムと呼ばれるローマの円形闘技場（写真 4）に代表される建物は，今で言えば巨大なイベント会場に該当する。剣闘士たちによる戦いの他，水を張って船を浮かべ，海戦の見せ物を開いたり，珍しい生き物を集めて動物園のように使ったりもした。豊穣なローマ建築を礎として，以降の西洋建築史は展開する。この様式からどのように離れて建築の新しい世界を構築するかが再び開始される。その観点からは，建物の歴史は要するにファンタジーの歴史とも重なっているとも見ることができよう。

写真 4　コロセウム（イタリア・ローマ）

太陽の船のつくりかた

山　下　弘　訓
サイバー大学世界遺産学部・助教

ピラミッドの麓に

「世界遺産といえばギザの大ピラミッド」という人もいるだろうが，ピラミッドを見上げてばかりいないで足元の周りに広がる様々な遺構を良く見てほしい。注意して見ると，船の形をしたものがたくさん見つかるはずである。大ピラミッドの東側，葬祭殿という施設の両脇にある巨大な穴，参道のすぐ北側にある穴，そして「王妃のピラミッド」と呼ばれるこぶりなピラミッドの脇にある穴。これらを良く見てみると，全て船の形をしている。そして最も注目すべきは，大ピラミッド南側から1954年に発見され，復原の後展示されているクフ王の「第1の太陽の船」。このように，ピラミッドと古代エジプトにおいて最も重要な交通手段であった船は，非常に密接な関係を持っているのである。

写真1　クフ王のピラミッド東側
中央に黒く見えるところが葬祭殿。その周囲に船の形をした穴がいくつも見える。

「太陽の船」とは？

古代エジプトにおいて，王は現世での人生を終えた後，太陽神ラーとなり，昼間は東から西へ，夜は西から東へ天空をわたると考えられていた。このとき太陽神となったファラオが乗り込むのが，「太陽の船」である。クフ王のピラミッド南側から発見された船もこの「太陽の船」ではないかと考えられている。

数少ない例

すでに述べたように，最も重要な交通手段であったにも関わらず，現存する実物の船はわずかに5隻しかない。古代エジプトでは船にできるような大きさの木材は貴重で，王のために造られるような場合を除いては木材を再利用していたというのも理由の一つである。

写真 2　復原・展示されているクフ王の「太陽の船」
全長約 43 m のこの船は，発見から 20 年余りの歳月を費やして復原された。

写真 3　カイロ博物館に所蔵されている木造船
全長約 10 m の規模を持つこの船も，クフの船と同様，レバノン杉を用いて造られている。

リシュトという遺跡では，ピラミッドを造るための斜路の基礎に船の廃材が利用されている例が見つかっている。5 隻の内訳は，エジプトのカイロ博物館に 2 隻，ギザの太陽の船博物館に 1 隻，のこりの 2 隻はアメリカのシカゴとピッツバーグに所蔵されている。

古代エジプトの船大工

わずか 5 隻では，船の造り方を知るのに不十分である。しかし，古代エジプト人は造船について様々な資料を残していることで知られている。小さいものは 20 cm あまりの大きさから，大きいものは 3 m にいたるまでの様々な大きさの模型や，お墓に刻まれた壁画である。模型からは船の全体的な形状やマストなどの付属品の情報を得ることができる。重要になってくるのが壁画で，エジプト全土に散らばる壁画には多様な造船のシーンが描かれている。特に有名なのが古王国時代の高官であったティの墓のもので，ここには 3 段にわたって造船の光景を目にすることができる。

写真 4　ティの墓に描かれた造船の様子
船を造る際の様々な工程が描かれており，施された彩色も良好な状態で残っている。

「太陽の船」の復原に向けて

現在，発掘されるのを待っているクフ王の「第2の太陽の船」のために，模型や壁画の研究はもとより，数少ない5例のうち，カイロ博物館に所蔵されている2隻についても研究をすすめ，それにより古代エジプトの船大工が非常に高度な技術を持っていることがわかってきた。それと同時に，どのようにして船大工が船を造っていたのかについても次第にわかってきた。また，1992年12月から1993年1月にかけて行われた，吉村作治教授（現サイバー大学学長）を隊長とする調査において，「第2の船」の木材の一部を採取し分析した結果，大きく劣化していることが判明した。人類の遺産を後世に残すため，早急な調査が望まれるけれども，非常に入念な準備が必要である。われわれはその日が来たときのために日々研究を続けている。

写真5　カイロ博物館での調査の様子
約3週間をかけて，これらの船を丁寧に実測するという調査を行った。

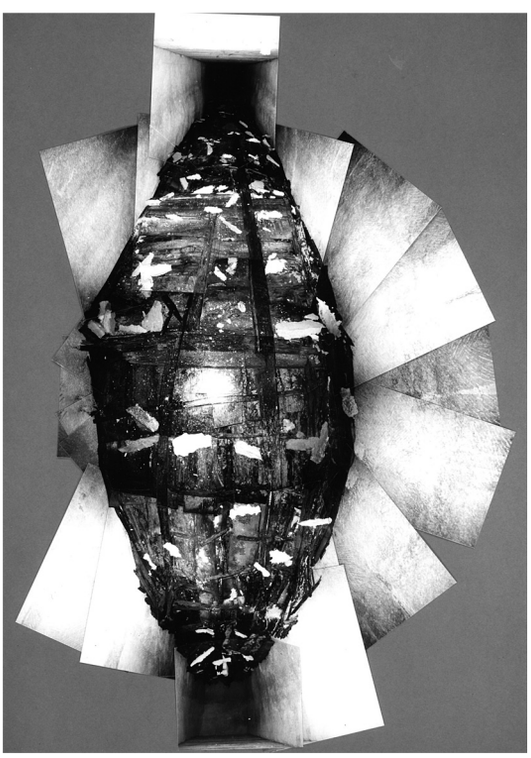


写真6　発掘を待っているクフ王第2の船
1992年12月～1993年1月にかけて行われた調査で撮影した写真を合成したもの。現在も地中に眠っている。

世界遺産の保全とエコツーリズム

高　梨　洋一郎
サイバー大学世界遺産学部・教授

ライオン１頭の値段はいくら？

エコツーリズムとは何かということを説明する例として，「ライオン１頭の値段はいくらか」という３択問題がよく使われる（石森秀三氏ら20数名による共著「エコツーリズムの世紀へ」21ページ）。

1：1325ドル
2：8500ドル
3：51万5000ドル

答えはいずれも正解だ。

もし野生のライオンを皮革だけにして売れば僅か千数百ドル，生捕りなら八千ドル台にしかならないが，野に放ち，サファリ用の観光資源とすれば実に五十万ドルもの経済効果を生むというものである。

これは，ピーター・ストレッシャーという研究者が1981年に東アフリカ国立公園のケースを例に，地元住民等による野生動物の密猟を止めさせるためにその説得材料としてはじき出した数字だが，ここに端的なエコツーリズムの意義が凝縮されている。

自然環境の保全や動植物の保護を声高々に叫んでも，そこに生活する住民がその価値を理解しなければ，持続可能な環境保全は成り立たない。欧米からの観光客で東アフリカのサファリ観光が軌道に乗りはじめ頃，政府や保護関係者にとって頭の痛い問題は地元民らによる密猟だった。

写真１　ライオン母子のこんなショットもサファリの魅力。ケニアのマサイマラ国立保護区で（フォートラベル：Kyonaさん撮影）

生活苦から密猟が続けば，結局，資源は枯渇して生活の基盤そのものが失われる。それより，動物を野に放し保全すればサファリ観光の目玉となって，ガイド業や宿泊業で雇用が生まれ地元にも継続的にお金が落ちる。一方では行き過ぎたサファリツアーが動物達の

ストレスを招いているといった指摘もされているが，それはオーバーユース（過剰利用）という次の問題で，エコツーリズムの基本的な考え方は，資源の有効活用により，住民の生活を安定させ，それによって資源そのものの保全をはかろうということにある。

世界自然遺産第１号ガラパゴス

もうひとつの例を紹介しよう。

東太平洋の赤道の近くにガラパゴス諸島というダーウィンの「種の起源」を生むヒントになった有名な海洋島群がある。南米エクアドルに所属する絶海の孤島だったが，1972年に初の世界自然遺産に登録されて以来，世界の観光客を惹きつけているエコツーリズムの象徴的存在である。3方向から流れてきた深層海流がガラパゴスの周辺で湧き上がる。それが豊富な漁場をもたらすことから，動物達は延々と固有種を育み，独特の生態系をつくりだしてきている。しかし一方，地元住民による動植物の乱獲も目を覆うばかりだった。

写真２　人間を怖がらない動物達との触れ合いがガラパゴス観光の大きな魅力（アートツアーセンター提供）

第２次大戦後，ある若手研究者の「島民による動植物の乱獲がひどくこのまま放置すればほどなくガラパゴスの貴重な自然環境は絶滅する」との報告をきっかけに，国際自然保護連合（IUCN）やユネスコによる保全活動が動き出し，結果的に世界自然遺産に登録されることになったものである。その時，IUCNなどの発想で導入されたのが「観光化によって必要な保護資金を生み出し，住民に新たな収入の道を開くことによって，動物や植生の乱獲を防ぎ，自然環境を保全する」というエコツーリズムの考え方だった。

エコツーリズムの考え方や技法

言うまでもなく，世界遺産条約制定の狙いは貴重な自然や文化を後世に残すことにあるが，登録する側からみれば多くは観光資源のブランド化である。

世界遺産化すれば，観光の誘因効果が高まり経済が活性化し，地域の人達に資源の保全意識が芽生える。自然観光資源を活用しながら，自然環境やそれと密接な関係にある文化資源を後世に残してゆこうというエコツーリズムは，そのまま世界遺産制定の理念と一緒である。

しかし一方，行き過ぎればエコツーリズムもかえって自然環境破壊の新たな観光公害に繋がりかねないことも確かだ。こういったことから，エコツーリズムには許容可能な収容力（キャリング・キャパシティ）や対象エリアを区分けして活用するゾーニング，インター

プリターやガイドによる生態系や文化の解説，資源保全のためのルールやガイドラインの設定など，環境保全に関する各種の考え方や技法を活用することによって，資源価値を劣化させず，持続可能な観光を実現し続けるための管理手法が必須条件となってくる。それを学ぶのがエコツーリズム学である。

写真 3　世界一の人気を誇るニュージーランドのミルフォード・トラック。ガイド付で世界遺産のスポットにいたる 3 泊 4 日の縦走コースは環境保全のため 1 日僅か 40 人までしか受付けない（Ultimate Hikes Ltd 社提供）

日本型エコツーリズムの本格普及期に

合掌造りの伝統的な集落が世界遺産になっている岐阜県白川郷が増大する通過型観光客に悩んでいる。年間の観光客は 150 万人という膨大な数に膨れ上がったものの，平均滞在は僅か 1 時間弱で落とすお金は一人平均 1500 円に過ぎず，肝心の滞在客は殆ど伸びていないという結果になっている。金はほとんど落とさず住民生活に支障をきたす交通渋滞などの観光公害だけを残してゆく観光客に，村は頭を抱かえるようになってきた。

これを解決するため，このほど白川郷では村をあげてのエコツーリズムに取組みはじめた。周囲の自然環境を活用してのトレッキングや，伝統食の「とちこち」づくりなど，観光客に宿泊して白川郷の自然や文化をじっくりと味わってもらおうという体験型観光のプログラムづくりだ。

まだまだ試行錯誤の段階だが，新たな魅力づくりへの挑戦であり，エコツーリズム活用の一例である。

写真 4　現在のまま推移すれば，世界危機遺産の仲間入りも心配される白川郷の合掌づくり集落（高梨洋一郎撮影）

エコツーリズムの理念は同じでも，自然環境やそこに育まれた文化が違えば，国や地域ごとにエコツーリズムの実践活動は違ってくる。日本では世界でもはじめてというエコツーリズム推進法が誕生，本格的な普及期を迎えることになった。

エコツーリズムの多面的な活用が，世界遺産の保全ばかりでなく，地域振興のエンジンとしても注目されることになりそうである。

ナイル川川下りで世界遺産誕生に出会う

上　　幸　雄
サイバー大学世界遺産学部・教授

“ナイルの水を飲んだ者は再びナイルに還る”ということわざがアフリカにある。ナイルに魅せられた旅人は必ずや再訪するチャンスがあるといった意味だ。私は，学生時代にナイル川の川下りに挑戦した。その 10 年後，私はことわざどおり，ナイル川川下りに再挑戦する機会を得た。そこで，私は世界遺産誕生との運命的出会いにも恵まれた。その時は，30 年後に世界遺産学部の教壇に立つなど，頭の片隅にそのかけらもなかった。

ナイル川の全流川下りに挑戦する

1968 年，私は同じクラブ（早稲田大学探検部）の仲間 4 人とナイル川全流川下りに挑戦した。どうせやるなら，世界で一番長い川（当時）を下ろうと計画した。古代ギリシャの歴史家・ヘロドトスが“ナイルは月の山から発している”との予言も若者のロマンを大いに掻き立てた。実際，ナイル川の水源には山頂に氷河を頂く標高 5000 m を越すルウェンゾリ山が聳え立っているのだ。ナイル川はそこから発して世界第 2 の淡水湖であるビクトリア湖を大きな水源とし，はるかエジプトまでアフリカ大陸を貫いている。計画は，そのビクトリア湖から地中海まで 6700 km をゴムボートで下ろうというものだ。ウガンダ国内のナイル川にボートを浮かべ，急流部にも挑戦した。だが結局は，川下りができたのはそこまでだった。ウガンダやスーダンでの政治紛争などで，ウガンダからスーダンへとボートで国境を越えることはできなかった。

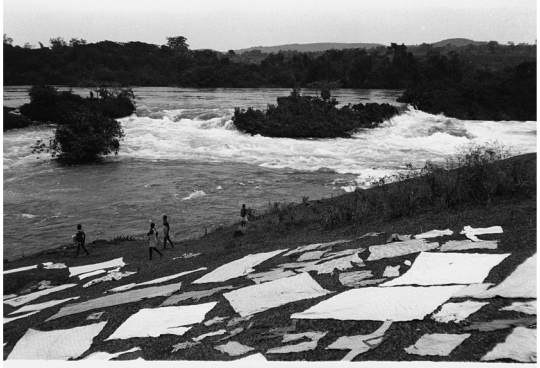


写真 1　ビクトリア湖から流れ出てすぐのナイル川（ウガンダ）土手に洗濯物（1968 年撮影）

写真 2　ウガンダ国内のナイル川を進むボート（1968 年撮影）

挫折後はボートを処分した後，ナイル川を航行する外輪船に乗ってウガンダからスーダンに入り，そこから列車に乗りカルツーム

（スーダンの首都）へ，さらにアスワンからカイロ（エジプトの首都），アレキサンドリアへとナイル川を旅するのが精一杯だった。それでも，地中海沿いの大都市・アレキサンドリア近郊のロゼッタストーンで有名なロゼッタで，ナイルの河口に立った時の感激は忘れることができない。河口に立つ灯台がひときわ印象的だった。

再び，ナイル川に挑戦する

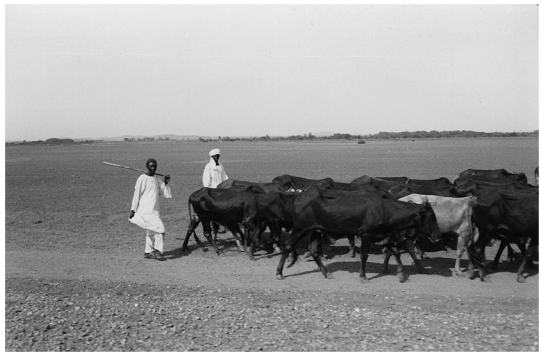


写真 3　ステップからヌビア砂漠へ

最初の挑戦から 10 年後，再びナイル川にボートを浮かべるチャンスが巡ってきた。この時もまた，ウガンダは激しい内戦状態にあった。テレビ局の応援を得た我がチームは内戦を避け，なんとか国境を越えてスーダンに入り，四国ほどもある世界で最も大きい湿地の 1 つサッド地帯へと入った。サッドは高さが 4 m にも達するパピルスが無限に続く不気味な世界だ。そこをやっとの思いで抜けるとステップ地帯になり，さらに，延々と続くヌビア砂漠を越えてエジプトに入る。そして，ロゼッタでついに目指す地中海に達することが出来た。最初の挫折から 10 年，世界最長の川・ナイル川の全流川下りに成功した。この間，2 回目のナイル川川下りに 10 ヶ月近い月日が経過していた。

ナイルで世界遺産誕生の現場に出会う

私はこの 2 回のナイルの旅で，自分の人生を決定付ける 2 つの歴史的出会いを体験した。1 つは，世界遺産誕生の場面との出会いだった。もう 1 つは，地球環境問題を目の当たりにした体験だった。ここでは，世界遺産との出会いについて述べることにする。

最初にエジプトを訪ねた 1968 年，エジプトのナイル川にアスワンハイダム建設の大プ

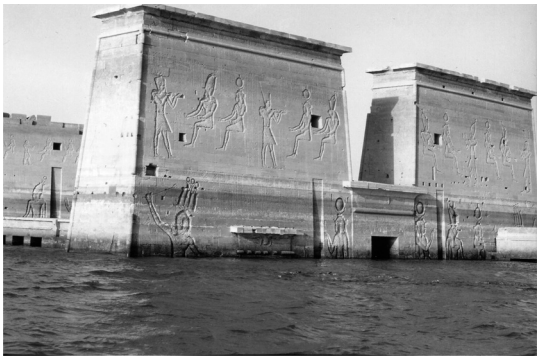


写真 4　水没するイシス神殿（その 1）
（エジプト，アスワン）

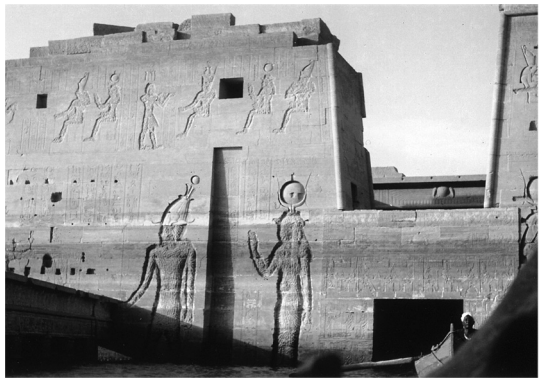


写真 5　イシス神殿の中をボートで入る

ロジェクトが進行していた。ダム建設現場では石工が1つひとつノミで石を削り，ダムの堰堤を積み上げていた。ロックフィルダムの建設現場は，まるで4500年前のピラミッド建設現場に立ち会っているかのような錯覚に囚われる光景だった。堰き止められたナイル川に巨大な人工湖・ナセル湖が完成し，湛水が始まっていた。その結果，川中島のフィラエ島にある古代遺跡・イシス神殿の半分は湖に沈んでしまっていた。私は友人とともにアスワンの船着場からヌビア人の少年が漕ぐボートに乗って，半分だけ水面から立ち上がったイシス神殿を巡った。ボートから手を伸ばし，巨大な壁面に浮かぶ女神のレリーフにそっと触れてもみた。その感激はつい昨日のことのようだ。イシス神殿のさらに上流では，ナイル川岸に立つアブシンベル神殿もナセル湖の水位の上昇に伴って，水没する運命にあった。

「世界遺産」誕生の地・アブシンベル神殿でミイラの疑似体験

1960年，これらヌビア遺跡をダムの底に沈めるわけにはいかないと，ユネスコの呼びかけで世界各国が立ち上がった。水没する運命にあったイシス神殿やアブシンベル神殿は，世界各国から資金と知恵を集め，かつてない国際協力による大土木工事の末に，すぐ近くの河岸に無事，移築することができた。この成功が1972年の「世界遺産条約」誕生となり，各国の文化財や自然資源はその国の財産であるばかりでなく，世界共通の財産であり宝物であるとする「世界遺産」の考え方の基礎になったのだ。

2回目のナイル川川下りの時，私は移築の済んだアブシンベル神殿を目の前にしながらナセル湖で泳ぎ，その晩は神殿の足元で寝袋に包まって一夜を明かす幸運に恵まれた。神々に抱かれたような，それとも自分自身がミイラと化したかのような不思議な感触に浸った。

世界遺産や環境問題に関わり続けている私にとって，40年前のナイル川での運命的な出会いは，アスワンハイダムの完成により消えてしまった“ナイルの賜物”が私自身の中に乗り移ったと思えてならない。それにしても，ナイルの水を飲んだものは，やはりナイルに還るのだ。

創立60年を過ぎたユネスコ

松　本　慎　二
サイバー大学世界遺産学部・教授

創立60年を迎えたユネスコ

第二次世界大戦の敗戦国日本を最初に受け入れた国際機関はユネスコであり，そのユネスコは2005年に創立60年を迎えた。筆者は30年あまりユネスコに働きその年に退職したから，ユネスコの後半30年を実体験したことになる。その間にはさまざまな激動があった。プログラムの偏向とマネジメントの非能率を掲げて米英が長い間脱退していたし，ソ連の崩壊や東西ドイツの統一など世界の勢力地図を大きく書き換える事件も少なくなかった。教育・科学・文化という一見政治とは関係のない主題を扱うユネスコもこうした国際情勢の影響を受けざるを得ない。

インターネットの普及とユネスコ

また科学技術の進歩，特にコンピュータの発達とインターネットの普及は単に日常的業務の作業方法に変化をもたらすだけでなく，ユネスコ本来の業務の地平を広げることにもなった。筆者は大学卒業後東京の国立国会図書館に勤務していたこともあって，ユネスコでも最初は図書館・文書館・ドキュメンテーション部という部署に配属された。おりからコンピュータ技術の驚異的発達により従来の古典的な図書館学，文書館学はドラスティックに変り，何事についてもコンピュータの導入が考えられるようになる。そして今やインターネットの時代である。地球の裏側にテレビ電話をかけても一文もいらないという時代になった。米国がユネスコを脱退したきっかけはユネスコが先進国ジャーナリズムの勝手な報道を規制すべく，新国際情報秩序を提唱したからであることは周知の事実だが，その背後には情報発信の手段を持たない発展途上国のいらだちがあった。ところが今や，誰でも，いつでも，どこからでも世界中に情報発信ができる時代となった。米国がユネスコを脱退している積極的理由はなくなってしまったわけである。それゆえ米国は，米国の復帰を選挙戦の中心にすえた松浦晃一郎現事務局長が誕生した後ユネスコに復帰したし，英国は米国以前に復帰している。

ユネスコの世界遺産事業

過去 60 年間，ユネスコは教育，科学，文化，コミュニケーションの分野で多くの活動を展開してきたが，中でも文化面での活動は他に文化に関わる国際機関が存在しないこともあり，特筆に値する。そしてその文化面での活動で最も成功しているのが世界遺産事業であると言える。フランス，イタリア，スペインなど歴史的な文化遺産を豊富に有するヨーロッパの先進国と，自然遺産の豊富な米国との主導で，1972 年に世界遺産条約が出来たとき，誰が今日のようなブームを予想したであろうか。日本政府にしても採択された条約はほぼ 20 年間たなざらしで批准の努力など何もしていなかったのが実情であった。

とはいえ条約採択から 30 年あまりを経て，ユネスコの世界遺産事業はすっかり定着したと言える。ユネスコという国際機関自体が非常に欧州中心的（Euro-centric）であり，世界遺産事業もまさに欧米主導型で，世界遺産の数が先進国に偏りすぎている，無制限に増やしていっては収拾がつかなくなるなど問題がないわけではないが，認知度，知名度という点ではユネスコの他の識字事業とかバイオエシックスなどは足元にも及ばない。

世界遺産学とは

では世界遺産について今後われわれはどのように扱っていくべきなのか？　そもそも世界遺産学は可能なのか？　世界遺産の正確な記録を残すこと ── これは世界遺産学の基本である。破損したり，失われた世界遺産を修復し，復元すること ── これも世界遺産学の一部門だ。さらに，ガラパゴス島のように生態系が観光客の激増によって脅威に曝されている世界遺産に関しては，バーチャルに体験できるシステムを開発すること ── これは特に将来性のある世界遺産学の一分野であろう。

世界遺産のこれから

2003 年に無形文化遺産保護条約が採択されたことにより，世界遺産には言語，公演芸術，民間芸能等々の無形文化遺産も含まれることになった。それらの保存・伝承・普及もまたこれからの仕事である。このように考えると，世界遺産の正確な記録をつくることはこれからの全ての世界遺産事業の根幹をなす基礎作業であると思われる。つまり，最先端技術を駆使した世界遺産のデジタルアーカイブ化である。あるルーマニア人専門家はこのデジタルアーカイブ化の目的を「ワンソース，マルチユース」という言葉で表現している。さいわいサイバー大学は IT 総合学部と世界遺産学部という，まさにこの基礎作業のためのような学部を擁している。日本が世界に先がけて提唱しているデジタルアーキビストの養成も，サイバー大学なら最適である。ユネスコそのものは人員の面でも予算の面でも小規模な機関で，世界遺産事業にしても現状が手一杯で，このような将来を見据えた新しい

事業を展開する力を欠いている。加盟各国政府や学会，民間の協力がなければ何もできないといっても過言ではない。と考えてくると，サイバー大学の将来は前途洋々たるものがあるといえるのではなかろうか。

今後とも生活の根拠は維持し，ユネスコの後輩たちの世界遺産活動をウオッチしつつ，世界遺産学部が世界にどう貢献できるか，世界遺産学部はどういう資質の学生を世に出していくべきか考えていきたいと考えている。

文化遺産保護の国際協力

青　木　繁　夫
サイバー大学世界遺産学部・教授

なぜ，文化遺産保護の国際協力が必要なのか

2003年1月，タリバンが崩壊して小康状態を取り戻したアフガニスタンの首都カブールにカブール国立博物館の復興支援計画案を作成するために行った。博物館周辺は，激しいカブール攻防戦が行われたところで，博物館が銃撃戦で破壊され多くの収蔵品が略奪された。破壊された博物館の玄関に立ったとき，そこに掲げられていた「歴史と文化がある限り，国は滅びない」を目にしたときの驚きは今でも忘れることができない。崩壊の危機に瀕した文化遺産の保存活動を実施する資金や能力を持つ日本が国際社会に対して積極的に貢献することは，軍事や経済支援だけではできない国際貢献と云える。日本のその平和貢献と云う崇高な役割は，国際社会からも大いに期待されている。

国際協力のみちすじ

文化遺産保存の国際協力の具体的な内容としては，以下のような項目がある。

⑴　保存・修復事業
⑵　歴史・考古学・建築・保存修復などの専門家や行政の専門家の養成
⑶　災害時における文化遺産保存支援
⑷　保存・修復に関する国際共同研究など

写真1　天井や窓が失われたカブール国立博物館　瓦礫が片づけられ骨格だけが残されている

写真2　破壊された仏像を集め木箱の収納し，カブール国立博物館の多くの仏像がタリバンによって破壊された

この協力を大きく分けると知的交流と保存修復事業協力に分けることができる。

国境を越えた信頼感や連帯感を生み，人的あるいは情報ネットワークを築く上で大きな財産になる。シンポジウム，共同研究などを通じた知的な交流。

実際に文化遺産を保存修復する事業がある。それらの事業を実施するためには，文化遺産の価値判断，宗教や民族対立，観光など地域振興，保存修復技術や修復材料，保存管理計画作成，技術者の確保や養成，資金など解決しなければならない多くの問題がある。保存修復協力事業を企画し，このような複雑で困難な問題を解決して完成させるには，様々な分野の専門家の協力を得ながら，事業を推進していく専門家がいなければならない。

国際協力の現場から

国際協力は，外務省や文化庁など日本の政策にそって提供される公的資金あるいは財団などからの助成金を基にして協力事業が行われている。協力の重点地域であるアジア諸国への修復事業が最も多く，中南米，東欧，地中海沿岸アフリカ諸国が協力の舞台になっている。ユネスコ文化遺産日本信託基金を日本が提供するようになってから平成 18 年度までに 32 件の修復協力が行われているが，そのうち 28 件がアジア諸国の案件である。その他，JICA による政府開発援助によるものを加えるとかなりの援助数になる。具体的な援助例を見てみると。

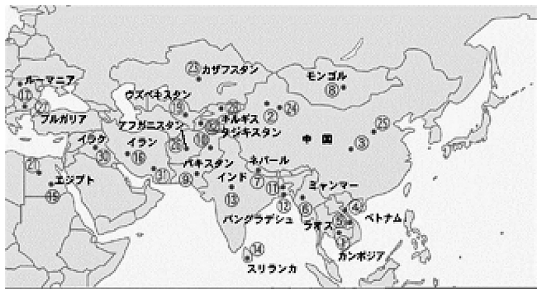


図　ユネスコ文化遺産日本信託基金によって，現在までに実施された協力事業。平成 18 年 1 月までに 32 件が実施されている

出典：外務省ホームページ（http://www.mofa.go.jp/mofai/gaiko/culture/kyoryoku/yukei/yukei_1.html）

アフガニスタン・バーミヤーン遺跡の保存

5 から 6 世紀にかけて繁栄し，玄奘三蔵が著した「大唐西域記」にも記載されているバーミヤーン遺跡は，タリバンによってバーミヤーン遺跡の象徴的存在である大仏が爆破されたことはあまりにも有名なことである。その後，世界遺産の危機遺産に登録され，日本政府がユネスコに拠出した「ユネスコ文化遺産日本信託基金」で，その保存修復事業が実施されている。バーミヤーン遺跡の保護と保観光資源としての活用を目指して「バーミヤーン遺跡の保存管理計画作成」，「壁画の修復」および「保存修復技術者の養成」を実施している。事業が進行するにつれて新たな遺跡や洞窟壁画などが発見されている。壁画修復に

写真 3　バーミヤーン遺跡・東大仏がみえる

写真４　Ｉ窟壁画の洗浄。壁画は煮炊きによる煤で黒く汚れ，壁画が判別できない

ついては，壁画修復に必要な洗浄技術の開発，剥落防止処置方法の開発が行われ，実施に移されている。ここで開発された修復技術は，この遺跡で日本人専門家によってアフガニスタン人専門家に技術移転と人材養成が行われている。

この修復作業の過程で彩色材料としてスズ箔が使用されていたこと，彩色前に壁面に対して「にじみ止め」処理を施してから壁画を描いたことなどが分かった。これらの技術は初めて発見された壁画彩色技法であり，シルクロード上に展開する壁画の技術交流を知る上で重要な情報が得られている。

敦煌莫高窟壁画の保存

世界遺産敦煌莫高窟壁画は，仏教をテーマとして５世紀から15世紀頃までおよそ1000年にわたって描かれてきた。400基以上の石窟に壁画が描かれ「砂漠の大画廊」と云われている。壁画の崩壊の原因追求，剥落しそうな壁画や塩類風化で壊れた壁画の修復技術の開発，壁画を描く技法の研究などが日中共同研究として行われてきた。また，石窟全体の保存問題として風で運ばれてきた砂によって石窟が埋没してしまうため，その予防処置として防砂林の設置などを行ってきた。

写真５　敦煌莫高窟頂上から続く砂漠。砂の移動防止ために防砂林が植林されている

写真６　壁画彩色の剥落防止処置。ゼラチンを注入して彩色層を接着する

近年は，観光客が多くなり観光シーズンの５月から10月の６ヶ月間で約70万人ほどの観光客が訪れるようになった。石窟内に沢山の観光客が入ると，石窟内部の温度と湿度が上昇して，湿度が70％を越すと壁面に含まれた「塩」が溶解して壁面を破壊する危険が増加してきた。壁画の塩類風化を防止するために，入場制限など包括的な保存管理計画を早急に作成しなければならなくなっている。

インドネシア・アチェ州立公文書館での被災文書の応急保存処理

2004年12月26日，スマトラ沖大地震によって発生したインド洋大津波があり，インドネシア・アチェ州でも10万人以上の死者，行方不明者がでた。

アチェ州は，15世紀頃から東西を結ぶ海上交通の要衝であった。そのためイスラム教関係の貴重な文書や図書，および東西貿易の記録文書が多く残されていた。

これらの貴重な文書類は，津波の泥水に浸かり壊滅的な被害をうけてしまった。津波直後から現地に日本人専門家を派遣し，被災状況の把握と文書を消毒用アルコールで洗浄し，凍結する応急保存処理を実施した。その後，日本政府の援助で乾燥処理を実施するために真空凍結乾燥機が供与され，乾燥処理の技術移転を行い，破損した文書の裏打ち補強などの修復技術の移転を目的とした研修会などを行った。現在は，公文書館施設の復旧が終わり，文書の修復が細々と行われているが，恒久的な修復体制の整備はこれからの課題である。

写真7　初歩的な裏打ち方法の研修会風景

さいごに

人類共通の財産である文化遺産を戦争や自然災害，貧困からくる盗取，あるいは経済開発の破壊から護ることができない国が多くある。保護のために必要な経験や技術を持つ日本が積極的にこのような分野で国際貢献を行うことを目的に，2006年正解の文化遺産の保護・修復に主導的な役割を果たすことを目的に「文化遺産保護国際協力推進法」が公布された。これこそが平和国家日本ができる最もふさわしい国際貢献であると云える。

インドネシアの国づくりと文化財政策

小　野　邦　彦
サイパー大学世界遺産学部・准教授

多民族からなる国家インドネシア

インドネシアのジャワ島には，約二億三千万の人口のうち，一億二千万にあたる半数ほどの人々が集住している。人口の大半がマレー系であるが，その他の民族の数も数百といわれ，また中華系インドネシア人も一定数おり，さながら民族の坩堝をなしている。これだけ多民族でありながらもひとつの国として成り立っていること自体，驚くべきことである。1945 年にインドネシアが独立を果たし，インドネシア共和国という国が作られた際，多様な民族をまとめてひとつの国として団結するため，なかば強引に「インドネシア民族」という概念が創造され，それを一般に浸透させるため，独立後も政府は腐心し続けてきたという経緯がある。その流れでマレー語を母体とするインドネシア語が新たに創出されたが，多数のインドネシア人は日常的な生活においては土着の言語を用い，しかし公共のテレビの視聴，また他民族との会話はインドネシア語を使っており，土着語とインドネシア語をその都度使い分けている，すなわち“バイリンガル”であるといえる。

「多様性の中の統一」というスローガン

多民族を一つにまとめるため，一体インドネシアという国はいかなる努力を払ってきたのか。たとえば国章。聖鳥ガルーダはヒンドゥー教の三大神のうちのひとつであるヴィシュヌ神の乗り物で，インドネシアの国章のモチーフになっている。その聖鳥の下には，「それは多様であるが，一つである」と記されている。意味するところは，遥か古代のジャワに，インドに由来する仏教とヒンドゥー教が流布し，仏教の仏陀とヒンドゥー教のシヴァ神の両者につき，異なるものではあるけれども本質は同じ，つまり一つなのだ，と。

古代に生起した思想が，現在は文脈を変えて，「多様性の中の統一」と通称されるスローガンとなっている。仏陀の本質，シヴァの本質，その両者は異なれども，一つなり。究極的には同じであると説く。この考え方はジャワ独自で，インドでもこうした思想は無かったと言われる。

また，インドネシアの国是はパンチャ・シラ（五原則）と呼ばれるが，神への信仰・民族主義・国際主義・民主主義・社会正義の五つがそれに該当する。この建国の理念を支え

るスローガンのひとつが，「多様性の中の統一」という考え方であり，歴史的に見れば，仏教・ヒンドゥー教の双方の宗教間で少なからず諍いはあったとしても，その中で絶えず共存共栄していく手法を模索し続けてきた。古代の人たちが残した平和への希求にかかる知恵，これを独立後のインドネシアでも温存して活用していこうと考えたわけである。

イスラム大国でなぜヒンドゥー・仏教遺跡か

現在のインドネシアには，イスラムの他に，仏教もキリスト教も，そしてヒンドゥー教もある。しかしイスラム以外，他の宗教は全てマイノリティーと言えるほどイスラム教徒の占める割合は多い。従ってあまりにもイスラム色の強いシンボルを政府が頻用したりすれば，すぐに他のマイノリティーから強い不満が沸きあがって争いの種が引き起こる危険性がある。反面，既に廃れてしまったヒンドゥー・仏教時代の遺物，しかしながら誇るべき価値のある古代の精神的な所産。これはさしあたりの利害関係の生じ難い，すなわち国のスローガンとして実に扱い易い代物で，であるからこそ現在に至るまで重宝され続けているという側面がある。

写真１　世界遺産に登録されている仏跡ボロブドゥール

そのような背景もあり，イスラムには礼拝施設モスクを始め価値ある文化財建造物が数多く残されているが，その種のものと比べても，明らかにボロブドゥール遺跡を始めとする，ヒンドゥー・仏教の遺跡を国の文化財行政は重視し続けてきた。

国づくりにおいては，ヒンドゥー教や仏教もインドネシアの長い歴史の中の一部なのだという考え方を強く主張し，過去に遡及しながら現代の課題を克服する道を模索し続けてきたといえる。

写真２　世界遺産プランバナン遺跡群の
プランバナン寺院

国指定文化財の多様性

インドネシアでは，在地の伝統的家屋が文化遺産となっているばかりでなく，オランダに植民地化された際のコロニアル建築も多数文化財に登録されている。ヒンドゥー教や仏

写真 3　ジャワ島の伝統的民家，貴族の邸宅ジョグロ

写真 4　スラウェシ島，トラジャの伝統的民家
トンコナン

教が渡来する以前の先史時代の遺跡も，また日本軍政下の防空壕なども国指定文化財となっている。

出自の異なる民族が生み出したさまざまな文化遺産。文化遺産の多様性からも，逆にインドネシアの多民族性が見て取れる。そしてこれらの文化遺産は，当然ながらその当初において，ある特定の民族や状況に帰するものであったわけだが，ここで“文化遺産”という新たな認識枠を与えられることにより，インドネシアという国のナショナル・アイデンティティを確認するための，我らが“インドネシア民族”の共通の遺産になる。つまり文化遺産に，“一つの国”，“一つの民族”という新たな価値が付加されることになるのである。

世界遺産保存修復の現場から

西　坂　朗　子
サイバー大学世界遺産学部・助教

エジプトの世界遺産「王家の谷」

エジプトの世界遺産といえばピラミッド？　エジプトの世界遺産はそれだけではない。現在，エジプトでは1件の自然遺産と6件の文化遺産が世界遺産リストに登録されている。

「王家の谷」はその6件の文化遺産のうちの1つ，1979年に「古代テーベとそのネクロポリス」として世界遺産リストに登録された地域の一部である。王家の谷は，現在の首都カイロから南に約600キロのルクソール市の西岸に位置し，今から紀元前1500年から紀元前1100年頃に，古代エジプト新王国第18王朝から第20王朝の歴代の王の墓が造られた遺跡である。その中でも，1922年にイギリス人考古学者ハワード・カーターが未盗掘の状態で発見したツタンカーメン王墓はこの谷を世界的に有名にした。ツタンカーメン王墓の5000点にものぼる副葬品，黄金の棺やマスクは，人々の古代への想像を掻き立て，この神秘な谷へ多くの観光客を呼び寄せてきた。

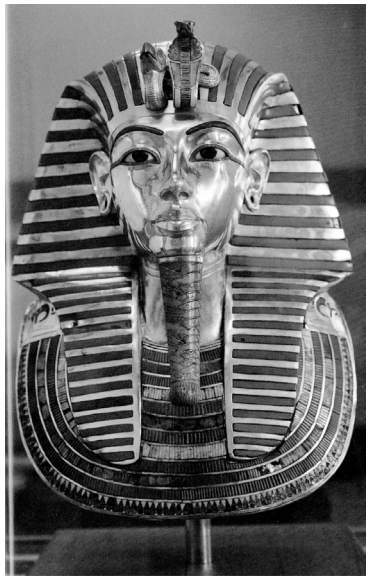


写真1　ツタンカーメン王の黄金のマスク（カイロ・エジプト博物館蔵）

押し寄せる観光客

日本国内ではキトラ古墳，高松塚古墳の壁画の剥ぎ取り作業や解体修理が相次ぎ，古代壁画の保存の難しさが明らかになったが，エジプトの古代テーベとそのネクロポリスでも，古代の美しい壁画の長期的保存が懸念されている。特に，王家の谷には，世界各国から年間200万人を上回る観光客が訪れる。観光客が王家の谷に滞在する時間は平均半日と短時間であるが，近年では，王家の谷の入口の駐車場は駐車の順番を待つ大型観光バスで溢れかえっている。特に観光客に人気のある墓の場合には，時には，墓の入口から墓の最奥部に位置する玄室まで，見学に訪れた人々で通路が数珠繋ぎになるほどの混みようである。

写真 2　王家の谷・東谷を訪れる観光客

写真 3　王家の谷・ツタンカーメン王墓の壁画

王家の谷の壁画は，こうした観光客の入場に起因する温度・湿度変化だけでなく様々な要因から劣化の危険にさらされている。

国際的協力による保存への道

このような状況下，エジプト政府をはじめ，各国の調査隊や研究機関が保存のための活動を開始している。最も簡単な方法は，観光客の入場を禁止してしまうことであるが，古代エジプト文明を知る上で重要な文化遺産の資源を「使い尽くす」ことなく保存していく方策が模索されている。日本の早稲田大学を始め，アメリカ，スイス，フランス等の調査隊がエジプト考古庁と協力して毎年調査や修復を実施している。

特に，日本は外務省を通じて「王家の谷遺跡保存環境整備計画」という案件で無償資金協力プロジェクトを実施し，エジプト政府の要請をうけて，「王家の谷」にビジターセンターを建設した。現在，ビジターセンターは，王家の谷の訪問者へこれらの貴重な文化遺産に関する情報を提供している。

王家の谷・西谷「アメンヘテプ 3 世王墓」

日本の外務省の支援で，王家の谷で行われているプロジェクトがもう一つある。それは 1989 年にユネスコに設置された「文化遺産保存日本信託基金」によるものである。この基金は，世界的な文化遺産保存に対して積極的な貢献を行うために設置され，世界中で事業が展開されている。王家の谷・西谷では，この谷における最も重要な王墓の一つ「アメンヘテプ 3 世王墓」の壁画の保存修復プロジェクトが，ユネスコ文化遺産保存信託基金を通じて実施された。プロジェクトの対象となったアメンヘテプ 3 世王墓は，第 18 王朝時代の王墓の中でも特に緻密に壁画が描かれ，古

写真 4　王家の谷・西谷，アメンヘテプ 3 世王墓周辺

代エジプト文明の繁栄と技術水準の高さを証明する遺産である（写真 4)。しかしながら，石灰岩盤を掘削して造られた地下の墓室の壁や柱には亀裂が入り，さらに壁画に付着した蝙蝠（こうもり）の排泄物による汚れや漆喰層の剥落によって危機的な状況に見舞われてきた。

壁画の保存修復

壁画の保存修復作業は，吉村作治教授（現サイバー大学学長）を隊長として，イタリア人，エジプト人，日本人を含む国際的な修復チームと日本人の専門家を中心とする科学調査チームを組織して行なわれた。

筆者は，この修復チームに参加し，イタリア人の主任壁画修復師の指導のもと，2001 年から 2004 年まで壁画の修復作業に携わることができた。作業の結果，今から約 3400 年前の鮮やかな彩色が蘇っただけでなく，汚れが除去された壁面からは考古学的な成果も多く得られた（写真 5)。

写真 5　修復作業風景（一番右が筆者）

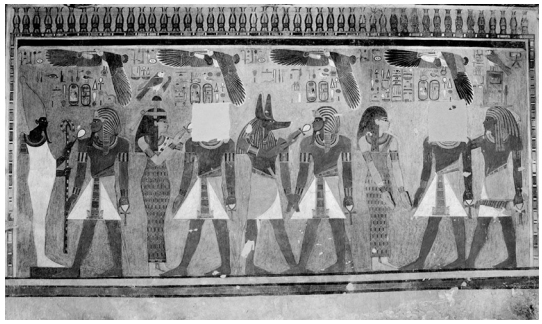


写真 6　アメンヘテプ 3 世王墓，修復後の壁画

2004 年に同プロジェクトは第 1 フェーズを終え，現在，次のフェーズに向けて準備が進められている。アメンヘテプ 3 世王墓の保存修復プロジェクトは英文で予備報告書が刊行（http://unesdoc.unesco.org/images/0013/139296e.pdf）され，保存への第 1 歩を踏み出すことができたといえる。今後は，王家の谷の他の王墓も同様に国境を越えた協力によって，人類の遺産を後世に伝えるため，様々な課題が早急に解決されることが望まれる。